
GOD EATER -PL/RAYERS-

阪川ヨシカズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R - P L / R A Y E R S -

【Nコード】

N 2 2 7 4 Z

【作者名】

阪川ヨシカズ

【あらすじ】

それは、神を喰らう者の物語。いや、神を喰らう者『たち』の物語。

フェンリル極東支部、通称：アナグラに、初の新型神機使いが現れる。……『二人』。そして、それに導かれるように新型神機使いはさらに集まる。

予定された時計の針は、徐々に狂い始める。さて、狂っているのは世界か、アラガミか、あるいは、人間か。

そして彼らに待つは、
神々の樂園か、
奈落の底か。

1・PLAYERS（前書き）

これはフィクション。こんな世界は存在しない。だけど、それは未来のことかもしれないし、遠く遠く宇宙の果てで現在進行形で存在しているのかもしれない。

それにかかわらず、あなたはこの物語を否定することができる。あなたの中の『ゴッドイーター』の世界を、壊されたくなければ、すぐに立ち去ることを勧める。

大丈夫、世界は無限に存在するから。

1・PLAYERS

NOW LOADING . . .

「READY . . .」

フェンリル極東支部、通称・アナグラ。旧型神機使いは多くいるが、未だ新型は一人もいない。

．．．だが、ついに適合候補者リストの中に、新型神機に適合するものが現われた。

この出来事は一日とせずアナグラ内に広がり、話題の大半はそれに関連するものであった。それほど、新型は重要視されているのだ。

「新型が入ってくるけどよ、俺たちの立場はどうなっちまうんだ？」

「焦るなよ。先輩面してりゃいいんだ、俺たちや。それにしてもさ、

」

新型が一度に二人も入ってくるなんて、珍しいこともあるんだな。

「睦月ケイスケ」

足が、震える。それとも地面が揺れているのか。そんなことは分かり切っているさ、この足の方がおかしいに決まっているんだ。

あとは、あとはここに、手を置けばいいんだ、手を置く、手を置け。それで終わり。たったそれだけで、すぐに終わる。一瞬で、一瞬で終わる、そうに違いない。

だから、ほら、さあ。早く終わりにしてしまおう。何のために、親父とお袋を説得してここまで来たっていうんだよ。ほら、早くっ。

だけど、強張った体はそう簡単に動いてはくれなかった。

そうこう思案していると、スピーカーから声が聞こえた。それは、女性の声。

「どうした？ 貴様はゴッドイーターとなるためにここまで来たの
だろう？ それなりの覚悟を持ってここまで来たはずだ。な
らば、この程度のことのできなくては困る。これからの任務はもっ
ときついだろうからな。」

忠告しておく。覚悟がないのならここからさっさと立ち去れ、そ
んなちやちな覚悟でこの仕事をやっていけると思うな！

その言葉を聞いて、胸が苦しくなった。俺の覚悟って、この程度
だったっけ。もしも、このまま帰ったら、帰ってしまったら。

俺の家族は、どう思うかな。

親父は俺の決断を聞いて、ただ一言、好きにしろって言った。けどそれだけじゃなくて、その選択に後悔はないか、って訊いてきた。

あの時の俺は、自信を持って縦に首を振ってたけど、今の俺は、どうなんだろう。

お袋は、……最後まで反対してた。だから、縦に首を振ってくれ
るまで、俺は何度も何度も頼んだ。そして、最後の最後にようやく、
半ば呆れながらも笑って了承してくれた。

そして今からちょうど一週間前に、神機に適合したという
報せが家まで届いた。それはもう、俺は手放して喜んだよ。その時
の母さんの顔は、やっぱり呆れていて、それでいて悲しげで。

それから今朝、家を出るときになって、ようやくお袋がまともに
話してくれた。いや、話したというよりは、俺に忠告した。

『死に急ぐなんて本当に馬鹿ね。一体誰に似たのかしら、ホントに
……。いい？ 絶対、死んじゃダメだからね。遺物で戻ってきた日に
はあの世まで殴りこみに行つてやるから、覚悟しておきなさいよ』

覚悟、か。俺の覚悟は、こんなもので、この程度で、破れ
る？ 一瞬の痛みで、俺の覚悟がぶち破れる？

なんだよ。どうして、この程度で俺の覚悟が打ち碎かれるなんて、
思つたんだろつな。本当に馬鹿みたいだ、俺つて。

「俺の、覚悟は。……この程度じゃない！」

俺はそう嘲り笑って、右手を機械の上に、差し出した。

その刹那、爆ぜる音と共に、これまでに味わったことのない、能動的苦痛が腕から体中へ駆け回る。その痛みは体中から汗と涙と喘ぐ声となって搾取された。

いっそのままで、楽にしてくれ。そんな考えを頭の中から追い出す頃には、痛みは最初から存在しなかったかのように鎮まっていた。

そして、機械の蓋(?)が持ち上がって、俺は腕に輪っかのようなものが嵌まっていることを確認する。そして俺の決意を見届けたかのような声を耳にした。

「決断が遅い。任務中は瞬間的な決断が必要とされる、少しの判断の遅れが命取りだ。 フェンリル極東支部へようこそ、……新型ゴツドイーター」

1441 訓練所エリア廊下

「睦月ケイスケ」

エントランスへ戻る途中、おそらく俺より年上の奴とすれ違う。そして、すれ違う時に彼は質問した。

「急に訊いてすまないが、何をされたんだ？」

どうやら、彼も神機の適合者のようで、今から腕輪をつけに行くようだった。そして、正直に答えて不安にさせるか誤魔化すか迷った拳句、「全然どころか一切痛くないようなことをされる」と、はいはい冗談ですけど何か？ みたいな感じで答えた。

「そうか、それならよかった。感謝する」

そう言って彼は行ってしまふ。

思えば、これが俺とあいつ

の初対面だった。

1442 エントランス

「睦月ケイスケ」

少し迷いながらもエントランスに到着する。アナグラの中は想像よりも遥かに広がった。

さて、指示が出るまで待っていればよかったんだっけ。ソファーにでも座っていようか。

つと、既に座っている人がいた。とりあえずその横に座ることにする。見る感じ、同年代のようだ。服は、ああ、居住区で今流行の服だったような。

「ガム食べる？」

「えっ？」

唐突に尋ねられ、少し焦ってしまった。

「えっと、ガム？ ガムね？ えっと、貰えるものなら貰っておきたいな」

俺がそう答えると、彼はポケットをゴソゴソとするが、…どうやら今食べているので最後だったようだ。それを聞いて俺の口から少し溜め息が漏れる。

「それで、誰だ？」

俺はまず聞くべきだった質問をいまさら口にする。さすがに一言目から「誰だ？」は失礼な気がしないこともないが。

「え？ ああ、俺はコウタ。藤木コウタ。少しばかりだけど俺の方

が早かったから先輩ってことで」

「それは認めない」

これでも競争心は人一倍なもので。意固地って言われても仕方ないよなあ。

「それじゃあ、俺も自己紹介しなきゃな。俺は睦月ケイスケ、ぴちぴちの15歳だぜ」

「あ、じゃあ同い年ってわけか、お互いよろしくな」

それを聞いて、少し安堵する。正直、俺よりも年上の奴ばかりだと思ってたからな。ところで、いつになったら指示が来るんだろうな。

「上官の人が来て説明してくれるらしいけど『うぎいやああいいひいいいいいいアアアアアアアアアアッ……イイイイイウウウウあああああ……！！！！』」

彼の言葉をさえぎって、突然、施設内に悲鳴が木霊する。受付やらあちこちやらからざわざわと声が上がったが、

「な、なな、なんだよ、今のっ……」

はっしとコウタは俺の手を握る。

「おい、手え握るな、痛い、痛いつて！！」

あ、あれ、椅子が揺れてる？ なわけないか、揺れてるのは俺だよっ。

「確か、腕輪を今つけてる奴いたよな、そ、そいつがほ、捕喰されてっ、」

こ、こは落ち着いてひひ否定しようぜ、お、俺っ。

「だ、大丈夫だと、おももも、おも、思ふっ……」

そして、騒がしかったエントランスに静寂が訪れる。だ、誰か何とか言ってくれよ、怖いって。

と、エレベーターから一人の女性が出てきた。……第一印象。でかい。どこかは言わない。第二印象。怖い。取って喰われそう。そして彼女は、俺たちの前で仁王立ちになる。そして、凜とした声で言った。
「立て」

……一瞬意味がわからなかったが、立つように命令されているのだと理解し、俺たちは立つ。さながら受刑者のようで、違和感を拭えない。ところで、この声はどこかで聞いたような気がする。

「私がお前らの上官を務める、雨宮ツバキだ。……先ほどの声の原因は黙らせておいたからもう問題はないだろう」

あの人沈黙させられたんだ。なんか良心が痛むなあ。そうこう思いなからあくびをすると、ツバキさんが俺をたしなめる。

「睦月。何を考えているかは知らんが、上官の目の前であくびなどは控える。二度目は蹴り飛ばすぞ？」

「あ、あっ、すみません」

そうだ、ツバキさん、だっけ。この人は俺に帰れって言ったやつだ。思ったとおりやつぱり怖いな……。

「メディカルチェックはサカキ博士の研究室で行われる。睦月は1500から、藤木は1630から。無論、時間厳守だ。……遅れるような真似をしたら、少々手荒な事をするぞ」
うわあ、絶対に遅れない。というか遅れられない。遅れたらたぶん命はない。

「分かったなら返事をしろっ！」

「は、はいイっ！！」「」

二人の声が初めてそろった。ツバキさんがエレベーターに乗ってエントランスを去るまで、俺たちは気をつけの姿勢でいた。

「睦月ケイスケ」

ここで合ってるか、不安になりながらも室内に入る。室内には、椅子に座る初老の男性と、よくCMで見かけるここアナグラの宣伝部ちよ もとい、支部長。

初老の男性は、ただただ俺には理解できそうにない機械をいじっていて、こちらに気づいている様子はなかった。

「サカキ博士。……サカキ博士」

せんで、支部長に二度呼ばれて、ようやく応える。

「なんだいヨハン、今は おっと、もう来ていたのかい。予想よりも263秒も早い」

それって要するに制限時間ぴったりじゃないか？ 俺はそこまでルーズじゃありませんっ。

……とは言ったものの、ツバキさんに言われなかったら多分そうしてたと思う。

「それで、めでいかるちえつくって何をするんですか？ まさか、注射とかするんですか？ 他にも注射とか、あと採血とか接種とか点滴とか注射とかするんですよねっ？！」

注射は大っ嫌いだ！ ここでサカキ博士がかぶりを振ってくれなかつたら本気で泣いてたと思う。

「……まずは、自己紹介としようか。私はペイラー・サカキ。ここ

フエンリル極東支部で技術屋、もといアラガミ技術開発統括責任者を務めている」

え？ アラガミ・・・ん？ 統括技術？ あれれ？

「なんですその早口言葉みたいな……。俺には縁がなさそうですけどね」

サカキ博士は、先に用事を済ませたらどうかと、せんで支部長に促す。

「サカキ博士が自己紹介をしたから、便宜上だが私もすることにしよう。名前は知っているな？」

「えっと、……ヨハネスう、……えっと、よはねす、ふおん、宣伝部長？」

あつ、眼光が鋭くなった。もしかしてこれ地雷っぽい？ 地雷だよな？

「……では親切に教えてやろう。私はヨハネス・フォン・シッケザール。ここフエンリル極東支部の支部長を務めている。 今後は、間違えても“宣伝部長”と呼ばないように心得ておくように頼む」

へいへい、そうでありんすか、はあ。またややこしい名前付けて、親の顔を見てみたいものだ。……調子のもつてスミマセン。

「さて、本題に移らせてもらおうか。……博士、これまでも重ね重ね言ってきたが、説明中に邪魔はしないように」

ピンポイントに釘を刺した。抜け目がないというか準備周到というか。

「まず、初めに確認しておくが、ゴッドイーターはどのような事をするか、知っているか？」

「ええ、それぐらい知ってますって。アラガミをちぎっては投げちぎっては投げ、瀕死になったらホールドランプで足止めして捕獲

用麻醉だ、」

「どうやら一から説明する必要があるようだな」

あれ、違ったの？ いや合ってるでしょ、ゴッドイーターってそういう職業じゃなかったっけ。

「主な仕事はアラガミのコアの回収及びアラガミの討伐だ。コアはエイジス計画を推進するために使わせてもらう」

エイジス計画。太平洋上に、周囲をアラガミ防壁で覆われた人工島・エイジスを建設し、生き残った人々を移住させるという計画。テレビで何度かエイジスを見たことはあったが、建設は最終段階に差し掛かっているように思われる。だけど、これだけは、これだけは聞いておきたかった。

「この計画が完成すれば、……みんな、みんな、助かるんですよ。俺の家族も、友達も」

その答えさえ得られれば、きっと心置きなく頑張れるはずなんだ。答えのない戦争ほど、馬鹿馬鹿しくて愚かなものはない。

「そのためには精進することだ。私からは以上だ、これで失礼する」

そう言葉を濁して、せん、支部長は退室しようとした。

「ヨハン、ちょっと待ってくれないか？」

不意に博士が呼び止め、せん支部長は少し呆れ気味で応える。

「博士、そろそろ公私の区別をつけては、」

「彼は、この支部の新型神機使いで、まだ若いから。大切にしてほしい。……君一人のものじゃあ、ないからね」

そう言って、意味深に博士は笑った。宣伝部長も、笑った。でも、目は笑っていなかった。

そして彼が退室するまで、俺は放置されっぱなしだった。

「よし、準備完了だ。それにしても、データを見る限り、君の潜在能力は私の想像をはるかに超えているようだ。ここまでとは思わなかったよ。……それじゃあ、そこに横になって、リラックスして。三時間後に目が覚めたら、そこは君の部屋のベッドの上だ。それじゃあ、始めようか」

言われたとおりにする。まず、シールつきの電極のようなものを体のあちこちに貼られる。なんだか少しこそばゆい。心電図が揺れるのがここから確認できるけど、いつもより早いのは、きつと緊張しているせいだ。

次に、酸素吸入の機械のようなものが顔に当てられる。そして、ゆっくりと呼吸をしてくれと博士に言われた。

……すると、急にうつらうつらとしてきて、

……博士の声が聞きとれなくなってきて、

……それが麻酔だと気づいたころには、

……電球が突然切れたかのように、目の前が真っ暗になった。

2002 自室

「睦月ケイスケ」

目は開いたけど、まだ目が覚めきらなかった。頭が冴えないとい

うか、まだぼーっとしてる感じがする。できればもう三十分、たった三十分でいいから寝ていたい。そんな調子で、目が覚めてから既に二時間が経過していた。さすがに、これ以上の睡眠は無粋だな。それにしても、今さっきから断続的に響くくぐもった音はなんだ？ 空っぽのドラム缶を打ち鳴らすような音が、ドンドン、ドンドンと響いている。……部屋の天井が鮮明に見えてきたとき、それがドアを叩く音だと気付いた。

「あ、あつ、はいはい、いまドアのロック外すから」

少し焦りながらドアのロックを解除する。そしてドアが開くと、いきなり鉄拳が飛び込んできて、俺は咄嗟にかわした。不意打ちかよ、きたねえ奴だなあ、おい。

「……貴様のことは、絶対に許さんぞ」

ただ一言が許されるのならば、全く理解不能と言うだろう。それほど彼の襲来は突然で、俺は彼のことを全く知らなかったのだから。「おいおい、いきなり襲ってきて名前も言わないってのはないだろ。まずは名乗ってからにしろよな」

俺の言葉に少し頭に來たようで、顔面目掛けて拳を振るった。怒りに任せた拳は、あまりにも避けやすい。静かな怒り、そっちの方が怖い。なんでかって言われたら、その、……お袋かな。うん。

「お前は俺の何が気に食わないってんだ？ というか先に名前を言っただけにしろ」

それを言ってくれなければ話は進まない。そして彼は質問に答えない。

「理由は分かるな？ 簡単なことだ。貴様は俺に、恥をかかせた。何だか分かるな？」

「いや、だからさ、理由より先に名乗れよ」

すると、少し目線をそらして、……自分の名前が恥ずかしいのかは知らないが、小声で言った。

「 榊レキ、…… 17だ」

榊？ 博士と関係があるのかな。と、苗字の方はどうでもいい。問題は、

「レキい？ またまた女っぽい名前だなあ。やっぱり漢字で書くところ」

「コヨミと書いてレキだ。そっちじゃない」

そっちってどっちだよ、おい。俺も一体何を言いたかったのやら。

「あ、その顔はどこかで確認した覚えがある。記憶領域の中から現在探索中つと。えーとお、確かー、…… ああ、絶叫した奴。そうかそうか。…… んで、俺に逆ギレですか、そうですか」

「違っつ！ 貴様が痛くないと言ったから楽…… に構えてたらこのザマだ！」

真面目だったのか、完全に俺の冗談が通用してなかったんだ、正直者というかバカ正直というか、それとただの馬鹿というか。…… だけど、そんな彼の気持ちも察せず、軽い気持ちで答えたのは、俺だ。

「俺があんなこと言わなきゃよかったんだな、…… 悪かった」

俺が頭を下げると、俺があっさり謝罪したことに少しばかり呆気にとられているようだ。そんな様子をコウタは見た。

「あ、もう一人入ってきた奴いたんだ。ということはまさかこの人が叫ん、」

「おい、貴様。本気で殴るぞ、もうずいぶん噂になってるじゃないか」

「そりゃああんたがあれだけ大きな声で叫んだんだもの、エントランス突き抜けてラボラトリまで聞こえたそうだよ」

ふと、レキは俺に向き直る。

「おい、そっちの名前はなんだ？」

そつちと言われ、一瞬誰のことかわからなかったが、この場には俺とこいつとコウタしかいないのでコウタのことだと判別した。

「ああ、俺？ 俺は藤木コウタ」

「よし、コウタ。こいつの体しっかり押さえてる。大丈夫だ、すぐ終わる」

むんずつとコウタは俺の体をつかみ、しっかりと羽交い絞めにする。そして、レキは関節を鳴ら（そうとするが鳴らないので、鳴らすフリを）して不敵な笑みを浮かべる。くう、コウタ、俺を裏切ったな！！

「何が何だか分からないけど、こうした方がいいような気がするんだよ」

「これ一発でチャラにしてやる。貴様の名前はなんだ？」

「え、えっ、……む、睦月、ケイス」

ケを言う前に彼の鉄拳が人中に食い込んだ。そして脳内が揺れて揺れてそのまま気を失った。

2018 ケイスケの部屋

「神レキ」

「その……すまん。本気でやりすぎた」

「ふあははひんひゅうひはいふほわほおあはっは（まさか人中に入るとは思わなかった）」

別に狙ったわけじゃないのだが、ケイスケが暴れたことと、コウ

タがあまりしつかりと押さえられなかったことで位置がずれてしまったのだ。正確には眉間の少し上あたりを狙ったのだが。ちなみに人中とは口と鼻の間である。あそこに入ると酷く痛い。

「全く、すごい音がしたかと思ったら。もうこっぴつことはしないですよ！」

小競り合いの後駆けつけた彼女が、彼を介抱してくれた。どうやら衛生兵のようだが。髪はセミロングで、それを髪飾りでまとめているようだった。

「……それよりも、わざとらしい。本当はもうまともに話せるんだろっ？」

「ちえっ、バレてたか」

バレバレだ。そして、彼が立ち上がると同時に、腹がなった。コウタはそれがおかしかったようで笑い出す。

「確か、配給のチケットでいろいろ引き換えてもらったっけ。レキが代わりに引き換えに行つてあげたってさ。ほら、冷蔵庫の中身見てみなよ」

一応、俺ができる償いといえば、これぐらいである。しかし、彼がこの程度で許してくれるか。

彼は冷蔵庫を開けると、冷気とともに、ささやかな配給品が入っているのを確認する。まず基本的な野菜。でかいトウモロコシに少し驚いた。あと、レトルト食品や、チューブ状のゼリーっぽいドリンク。そして炭酸や野菜などのジュース。

「よし、俺が引き換えてやったんだから正当な労働賃金としてジュース一本貰い」

「誰がやるかよ！」

俺なりの冗談のつもりだったのだが、真に受けられた。俺が言ったら冗談に聞こえないのか、そもそも冗談ってどんなものだろうか

……？

「とりあえず、俺は自室でゆっくりディナーとしよう。これでも料理は得意だからな」

「ああはいはい、お疲れ様でございました」

小馬鹿にされながらも、俺は部屋を出る。そして腹は、空腹のサインを放った。

2042 エントランス

「睦月ケイスケ」

ツバキさんに俺たちは呼ばれたが、一体何があるというのだろうか？

「よっ、お前らが新入りか」

突然声がかかって、弱虫の俺はビクツと震える。そして、落ちて着いて声がる方向を見ると、一人の男が立っていた。

「え、ええ、はいはい。俺らが新入りですよ」

とりあえず俺は深呼吸をしながら応えることにする。すると彼は、ポケットからタバコを取り出してくわえる。そしてライターの火を、

「リンドウさん、エントランスは禁煙です」

受付の女性に咎められ、渋々タバコをしまう。

「それで、どなたですか。……腕輪を見る限りは、神機使いのようですが」

レキが彼に質問したら、彼は口元に笑みを浮かべて答えた。

「ああ、そうだ。お前らは多分あねう　　雨宮上官に呼ばれているんだろう?」

あれ、いま姉上って言おうとしたよな、それってもしかして。

「よし、時間には間に合ったようだな　　と、リンドウ。こいつらにちよつかいを出したりはしていないな?」

「いいえいいえ。それでは、俺は少しデートに……」

そう言い残して彼はそそくさとエントランスを抜け出す。間違いない。あの男、ツバキさんの弟だな。

「さて、では訓練に行く。主に神機の操作、特に新型は銃形態と剣形態の変形操作について理解しろ。これができなければ、一生ミッシヨンには出られんぞ?」

そ、そんなのはごめんだ。しつかり頑張らないとな、何のためにこの職業に就いたんだ、俺!

そして俺たちは、訓練所へと足を運ぶ。訓練所はたくさんあるよ
うで、今から俺たちが行くのは、第二訓練所。

一体何をするかドキドキしてきた。このドキドキは不安なのか、それとも期待なのか。そんなことは分かるわけがないが、俺たちは戦場への一步を確かに踏み出していた。

2011 第二訓練所

「睦月ケイスケ」

「よし、そこまで」

ツバキさんの声がかかり、俺は足を止める。……神機はこんなに

も軽々しいのに、膝が笑っている。体力には自信がある方なんでしょうな。

「最初は神機に慣れていないから大抵そうなる。じきに治まるだろう」

……とりあえず、一通りの動作を学ぶことができた。通常は一人ずつの訓練らしいのだが、やはり三人まとめて入隊されたのが面倒だったらしく、一度に行ったそう。そして、ようやく終了の時間となったので今日はひとまずこれで解散だそう。

ちなみにレキ（あとで年上だからさん付けにしろと言われた。殴っておいでそれはないから呼び捨てにさせてもらう）と俺は、同じメニューをこなしたが、コウタはまた別のメニューだったようだ。旧型と新型の違いってのはこういうところで現れるわけか。

「明日の朝はくれぐれも、遅れないように。少しでも遅れたら休憩はなし、予定の時間の二倍は動いてもらうことになるから、覚悟しておけ」

そう言われたら絶対寝坊する気なくなる。早く休みます、ばつちり寝て早起きします。

「ふう、やっと終わったか。あー、疲れたな」

レキとコウタは地面に仰向けになっている。俺はそこまで疲れてはいない。わけではない。だがへばったら負けのような気がする。なのでそういうことはしない。

「んじゃ俺はジュース買って来るから、コウタも欲しかったらついでに買ってきてやるよ」

「おい、俺は」

コウタの分だけ聞いて訓練所をいったん飛び出した。後ろからばかやるーって声がかかったけど気にしない、あーあー、聞こえないの言葉ー。

自動販売機の前に到着。さて、コインを投入　あれ？

「こ、これどうやって使うんだよ、おい。硬貨投入口どこだ？　居住区に合ったやつと違うぞ？」

これは参った。さすがに手ぶらで帰るのも悪いし、うーむ、どうすれば買えるんだ……？

「ああ、お前がうわさの新人か。こんなところで何やってるんだ？
「え？　あ、え、えっ……と……」

2013 第二訓練所

「榊レキ」

「まったく、俺の分はないってのは冷たい奴だな」

俺は溜め息をついて、そう愚痴る。

「そりゃあ恨みでしょ。痛そうだったし、あれ」

言い返せない。確かにあれは俺が悪かった。もっと謝っておくべきだったか。

「ところで、聞きたいことがあるのだが。……なぜゴツドイーターになっただんだ？」

俺はなぜかそんな質問をしてしまう。やっぱり疲れているみたいだな、今の俺は。

「なんで……って。かーちゃんと、ノゾミ　ああ、妹のことだけどさ　ノゾミたちをさ、守りたいんだ。……俺が守ってやらないと、二人を笑顔にしてやれないからさあ」

強い奴だ。俺よりも年下のくせに、信念を持っていて、
…とても妬ましくて、自分がとても、
「……情けないな、……俺は……」
自分に向かつて、そう呟いた。俺は、……逃げた。全てを投げ出
して、目を背けた。だけど、仕方ないんだ。仕方なかったんだ。
…耐えられなかったんだ……。

「じゃあさ、レキはどうなんだよ。何か目的があってなったんだろ
?」

コウタの問いに俺は答えられない。だから俺はサツと立ち上がり、
神機を持って黙って退室しようとする。

「……おい? そっちが先に質問したんだから答えてよ」

「……すまない。……今の俺には、……答えられないんだ」
俺はそう言っただけで逃げるように部屋を去った。

2015 訓練所エリア廊下

「睦月ケイスケ」

「ほら、こつやつたら出るぞ」

そう言っただけで彼は腕輪を電子部分に当てた。するとガコン、という
音とともに、コーラが2本出てきた。

「支払い腕輪でできるんだ。……そういうの一切聞いてなかつ
たからなあ、ははっ。てつきり現金かと」

俺は苦笑しながらそう呟く。

「ほい、コーラ2本でいいんだろ?」

彼は缶を渡すと、その場から去ろうとする。

「あ、えつと、代金は？」

「そいつは奢りだ、入隊祝い。いつか同じ任務に出られるといいな！」

笑って、彼は立ち去って行った。……入隊祝いなら、悪い気はない。

「大森、タツミさんか。いい人だったな」

俺も、彼のような人と任務に出たいと思った。

これ以上コウタを待たせるのは悪いので、さっさと戻ろうか

と。……ん？

「あれ？ レキ？」

「」

レキは、何も言わずにすれ違う。ということはもうすぐコウタも来るかもしれないな。

……だけど、彼の顔は、あまりいい表情には見えなかった。どうしたんだろうな、一体。

「あ、いたいた。何してたんだよ、すぐに買ってくるかと思ったのに」

と、コウタが走ってきて話しかける。

「いやあ、買い方が分からなかったんだよ、ほら、居住区のと違うだろ」

俺はとりあえず弁解して、すぐに分かってもらえた。コウタはしっかり聞いていたようだ。意外だな。

「ところでどうしたんだ、レキの奴？ あんまりいい雰囲気じゃなかったみたいけどよ」

「いきなりさ、なんで入隊したのかって質問して、答えた後にレキ

はどうなんだって訊き返したら、あんな様子になっちゃって」

「要するに地雷踏んだってことだな。そのうち機嫌も直るだろ、ほっとけばいいさ、ほっとけば」

コウタは、「そうかな？」という顔をしたが、勝手に納得したよ
うで、俺から受け取ったコーラのプルタブを上げて飲み始めた。俺
も做ってプルタブを上げ、揺らしすぎた炭酸飲料の洗礼を顔に受け
る。

「うわっぶ」

0629 第二訓練所

「神レキ」

「時間には間に合ったみたいだな おい、起きてるのか、お前
ら」

立ったまま寝息を立てる二人。こいつら、どこでも眠れるのか？
「気をつける。ツバキ上官が爆弾を持ってきたぞ」

ビクツと二人は震えあがり、目を覚ます。ちなみに言っておくと、
爆弾ではなくスタングレネードである。

「この名称は分かるな、睦月」

「えっと、……閃光玉？」

馬鹿か。それとも寝ぼけているのか？

「スタングレネードだ。覚えておくようにな」

ツバキさんは直視しない方がいいと言ってピンを抜き、地面に叩
きつける。すると、閃光がほとばしり、爆音が鳴り響く。目をつぶ
ったが、目の前が白んだし、耳がじりじりとなって痛くなった。

「こいつはアラガミにも通用する。使い方は簡単だ。ピンを抜いて、地面に叩きつける。お前らにもできるだろう?」

「無論だな」

俺はスタングレネードを受け取ると、ツバキさんがやったようにピンを抜いて叩きつける。

「うおっ、眩しいっ!」

少し目の前がチカチカしてしまう。閃光と音が収まると、コウタも一つ受けとった。

「じゃあピンを抜いてっつと。えい!」

ワンバウンドして、時間差で閃光を発した。どうやら力が少し足りなかったようだ。これではアラガミに隙を与えてしまう。

「それじゃあ俺も一つもらいつつと」

ケイスケは、ツバキさんからはっしとスタングレネードを取ってピンを抜いた。

「てえい! ……あれ」

思いつきり地面に叩きつけたように見えたが、不思議と反応がない。不発のようだな。

「なんだよお、俺がやった時だけこれってありますか?」

そう言っつてケイスケは不発弾を拾い上げようとする。おいよせっ、こいつ、寝ぼけてるのか?!

「ば、馬鹿っ、よ、よせ!」

ツバキ上官が制止しようとするも、彼は聞かない。

「大丈夫ですって、ツバキさん、これぐらいどうってこと、」

案の定、マグネシウムはその一瞬で反応を連鎖させ、辺りが真っ白になる。俺たちは咄嗟に目をつぶったが、ケイスケは間に合わな

かったようで、閃光の直撃を喰らった。
そして再び確認すれば、果たして彼は倒れていた。

「お、おい、ケイスケ！ 大丈夫かよッ?!」

「睦月！ しつかりしろ、睦月!!」

どうやら、完全に失神しているようなので、俺とコウタで病室まで運ぶことになった。面倒な真似を……。

0652 病室

「睦月ケイスケ」

「ん?」

今さっきまで訓練所にいたはずだが……おかしいなあ。なんで俺、寝てたんだ？ しかもここって病室じゃねえか。

「ああ……、……そっか」

寝る前のことを思い出す。確か、不発のスタングレネードを拾おうとしたら、目の前で暴発して、そのまま昏倒してしまったんだっ
たっけ。

「んあ、ツバキさん」

気づいたら横にツバキさんが立っていた。オーラが出てる。キレてるよ、絶対キレてるよこの人。

……そして、とりあえず彼女は一呼吸おいて言った。

「普通の奴はあんなことはしない。どうしてあんなことをした？ 私には理解できない」

「いや、あれはその、……知らなくて……」

「知らないじゃ済まされないこともある。だが、私が怒っているのはそういうことじゃない。……私の忠告を軽んじたことだ」

「っ、……それはっ……」

要するに、ツバキさんは俺が失敗をしたことを怒っているのではなく、それを防ぐための忠告を聞き流してしまったことに怒っているのだろう。……甘く、見過ぎていた。

……俺が何も言えないでいると、ツバキさんは溜め息をついて、俺にとつて最も恐ろしい言葉を口にする。

「向いてないのかもしれないな、ゴッドイーターに」

心が抉られた。この感覚を、知っている。入隊した時の、あの躊躇いするとき。……でも、その時とは比べ物にならないくらい、心が痛くなった。

子どものころからずっと、ゴッドイーターにあこがれていた。でも、親にはなかなか言い出せなくて。そして、初めてなりたいたったとき、両親そろって向いていないと言った。

あのころのデジャヴ。嘘だ。嘘だ嘘だ。俺は、強くなったんだ。たぶん、いや、きっと強くなれる自信があるんだ。それを否定されて、俺は……俺は。

「そ、そんな、違いますって！ 確かに俺、非常識なところとかたくさんありますし、もっとたくさん迷惑かけるかもしれない！ それに、それにっ　俺、ただの馬鹿ですし！」

吹っ切れてしまふ。もはやどうしようもない領域、自分で自分が嫌になる。だから、それを聞いて、ツバキさんが少したじろいだよ
うに見えた。

「馬鹿だけど、精一杯がんばりますよ！ みんなの邪魔にならないように戦って、誰ひとり傷つけさせない！ あいつらだって、親父も、お袋もっ！ たとえ俺がゴッドイーターに向いていようとなくろうと、俺は絶対に、強くなるっ！..!」

こうなつたらもうヤケだ。やけくそだ。それはきつと、あのとさずいぶん時間をかけなければ得ることが叶わなかった、覚悟に違いない。なんで今になってこんなにすんなりと出てくるのだろうか？

そして、そのわけを自分で言いながら理解する。俺がただの、馬鹿だからである。馬鹿の俺が、追い詰められた末に見つけ出した、一つの決意。

そんな俺の熱弁を聞いて、ツバキさんは含み笑いをした。おかしかったのだろくな。笑いたいやつは笑えよ、これが馬鹿の俺の全身全霊の覚悟の表現だ。

「いや、……本当に、若いころのリンドウにそっくりだと思ってな。確かに、向いている、向いていないじゃない。強くなる奴は強くなるし、変わらない奴は、いつまでも変わらない。…… 変わらない奴がなぜ変わらないか、分かるか？」

俺は考えるが、…… やっぱよく分からない。すると、ツバキさんは答えた。

「 変わらない奴は、変わろうとしないからだ。変わりたいと思わないから、変わることができない。だから、強くなりたいと思う奴は、絶対に強くなる。それが心からならば。」

貴様のような奴は、大抵私がそう言ったらもう少し気の利いたことを言うのだが、それ以上の答えだな、これは。素晴らしいゴッドイーターになれると信じているぞ。……睦月」

「は、はい！」

なんだか心が温かくなったような気分。ツバキさんが、こんな人だとは思いつまなかった。……なるほど、だからこそ俺は、ここ極東支部のゴッドイーターにあこがれたんだ。

「さて、しつかり休んだのならば、いよいよ本番だ。初めての任務だ。……いいな？ 時間に遅れたらそれ相応の罰は受けてもらう」
やっぱりいつもどおりのツバキさん。でも、それがいい。

だから、自信を持って返事をする。本当は、もう一度ベッドに潜り込みたくなるほど怖いのにな。でも、覚悟と決意を言ったからには俺は、守るために、強くならなくちゃならない。

「……はあああああ、……ふうふうふうふう。よしッ！」

ゆっくりと深呼吸。そして俺はベッドを飛び出す。

そして病室を飛び出して、……廊下で足を滑らせて思いっきり転んだ。万事オーケー。

1・PLAYERS（後書き）

やっちゃった。やらかしてしまった。・・・処女作にして、歴史がグレーになっていく。

いやいや、こんな調子じゃだめだ。読んでくれている人がいるならば、頑張らないと！ というわけではじめましてこんにちは。

今回のコンセプトは、『主人公がたくさんいたら？』ですね。無論、本編では一人で、こんなにおしゃべりじゃありません。だから黙らせておくのはかわいそうでしょう？ いや、この理屈はおかしいか。

まだ一話目なのに、こんなに飛ばしちゃっていいかなあと思う。とりあえずアリサは出そう（笑）

それでは、また次回まで。

2・OPEN FIRE

0712 エントランス

「睦月ケイスケ」

「おいおい、遅いよー」

「ごめんごめん、寝坊しちまってさあ」

「……何が寝坊だ、今後はあんなへまはしないでくれよ」

ばつちり俺が下手こいてぶっ倒れたってことはバレてる。そりゃその場に居合わせたんだもんな。

「それで、初任務ってなんだろう？ ワクワクしてきたよ」

俺は足ががくがくしてきた。あんなに意気込んで病室飛び出してきたのにさ、もっと俺に勇気とかがあればなあ。俺のかいしよなし！

しばらく待つっていると、煙草の臭いがした。見ればそこにはこの前会った……誰だったっけな。

「ん……と、確か。リンドウさんでしたっけ」

リンドウさん？ ちょっと脳内散策ーっと。……ダメだ、顔と名前が一致しない。

「また会ったな、新入り。お前らを任務に同行するのが俺の任務ってわけだから、今後ともよろしくな」

とりあえず俺はよろしくお願いします、と頭を下げる。続いてコウタ、レキと頭を下げた。

「ところで……一つ質問するが、お前ら全員一遍に、任務に連れて行かないやいけないのか？」

早速、リンドウさんが頭をポリポリと掻きながら言った。

「ツバキさんがそう言ってたんじゃないですか？ 俺たちは初任務、としか聞いてないんで」

「確かに俺はあねう、上官殿に一任されたが……三人はちよいときついぞ？」

リンドウさんは、少し考える素振りを見せる。やはり彼一人では俺たちは手に負えないのか？

「あ、リンドウ、ここにいたのね。部屋にいてもいなかったから少し探したんだけど」

鈴を転がすような女性の声が俺たちの背中から掛かった。もちろん俺たちは背を向けているから見えないけど、リンドウさんはその女性を見て少々表情が和らいだように見えた。知り合いかな。

「ちようどよかったサクヤくん、ちよつと手伝ってくれないか？」

……ああ、なるほど、リンドウさんが何をしたいか分かった。

「内容にもよるけど、ところで聞くけど、この子たちが新しく入ってきたのかしら？」

「ああそうだ。おっと、自己紹介を忘れていたな。俺は雨宮リンドウ。苗字を聞けばわかるだろうが、あのツバキ上官の弟だ」

この前のツバキさんの反応で何となく感づいてたけど、あんまり似てないや。

「で、こつちが、」

そう言っただけでリンドウさんは、女性にこちらへ来るよう促す。そして目の前に現れた女性を見て、……男なら誰もが見惚れる体系に少し愕然、そのうえ露出度の高い服を着ていることに啞然、そして胸部に見ゆるは……ゲフンゲフン！ れ、冷静になれ、俺！

「私は橘サクヤ。リンドウが迷惑かけたら私に言っただけ、あ、でも私よりもツバキさんに言っただ方がいいかも……」

「おいおい、勘弁してくれ」

サクヤさんが笑って、つられて俺たちも笑った。そして一通りの自己紹介を終え、サクヤさんは切り出す。

「それで、何を手伝えばいいのかしら？」

「こいつらを任務に連れて行きたいんだが、一度では俺一人だけだと手に負えないからな。誰かを手伝ってくれないか」

サクヤさんも俺たちと接触できるチャンスを探っていたようなので、快くOKしてくれた。

「んじゃあ、話し合いでもジャンケンでもなんでもいいからさっさと決めてくれ」

「俺はサクヤさん」

「俺もサクヤさん」

「フン、……俺も、その、……橘さんがいいが」

「っておい、ちよつと待てガキども」

そりゃあこんなおっさんよりかは、サクヤさんと一緒の方がいいに決まってるよな？

あ、少しリンドウさんの顔がこわばってきた。まだ辛うじて笑っているけど、目元が引き攣ってる。

「よし、ジャンケンだ。一番に負けた奴がリンドウさんとデートだぜ」

「おい、何の罰ゲームだこれは」

「妥当じゃないか。俺は構わない」

「うん、いいと思うよ」

「そしてなぜ了承する」

リンドウさんのツツコミを無視して、三人の手が同時に出される。さて、誰が負けるのか？ ちなみに俺は結構ジャンケンに強い。結構強いんだよ、ホントに。

自信を持ってカツと目を見開くと。

「睦月ケイスケ」

「ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶ……」
二人はパーを出した。おかげで俺はこのおっさんと一緒ですか、はいそうですか。

「……俺のこと、どう思ってるか正直に言ってくれ。怒らないから」
「とつても頼りなさそうに見えるし、すぐにリスポーンしそうな感じがするぜ」(すごいと思いますよー、俺の上官にはとつてももつたいたいと思いますー)
「本音と建前が逆だが」
しまったと思った時には時すでに遅し。微妙に怒っているように見受けられる。
「それに俺のことは見くびってもらっちゃあ困る。一応姉上の弟だからな、相当強いぞ?」
確かにそれも一理ある。なんせ彼は『あのツバキさん』の弟だからな……。

「それじゃあちゃっちやと始めちゃいましょうか、もうミッションは始まっていますよ」
「まあ待て。まずは上官から新入りへ出す三つの命令だ。言う通りにすれば何事もうまくいくだろう」
おお、折角だから聞いておこうか。強くなるためだからね。はやくはやくと少し急かしてみる。

「簡単なことだ。『死ぬな』、『死にそうになったら逃げる』、『それで隠れる』。『運が良ければ隙を突いてぶっ殺せ』。な、簡単だろう?」

「それ全部で4つです」

それを言つと、リンドウさん自身も気づいたらしく赤面した。やつぱり大丈夫かどうか不安になってきた。ホントに強くなれるのかな……?

……でもこれって、新人全員に言ってるってことは、まさかこれも計算のうち? そうだったなら、地味に謀略家かもしれない。たぶんないと思うけど。

「とにかく、そのルールを守れば一人前のゴッドイーターになれるんですよね?」

「ああ、命あつてのモノだからな。それじゃあ、そろそろ行くでしょう。できるだけ静かにしろよ」

リンドウさんがゆっくりと歩んでいく。俺はその後ろをゆっくりと付いていく。そして、目標を視界に捉えた。そいつは、この世にいてはいけない、鬼の形相でそこに居て。

夢中で何かを食べているようで、こちらには気づいていない。よく見ると、……金属の塊のようだが、よく分からない。

「……確か、オウガテイル、でしたっけ。近くで見るとやっぱり迫力がありますね」

「しつ、黙つててくれ。できるだけ背後を狙うんだ。大抵のアラガミは奇襲が良く効くからな……」

少しずつ、目標に近づこうとする。足元に気をつけて、出来るだけ気配を消して、ただ音をたてないように進んで、……敵の背後に回り込むことができた。

「捕喰の方法は分かるな? 捕喰形態に切り替えたら一気に喰らえ」
それぐらい分かっている、たくさん訓練してきたと、心の中で

ボヤきながらも捕喰形態に切り替えて、……喰らう。黒い血のような液体が、ピシャツと顔に飛び散って少したじろいだ。

だけど、それ以上に気分が高揚して、体が軽くなったような気がする。訓練でもそんな感じになったが、えっと、バースト状態だったっけ。神機が活性化しているらしいからドンドン攻撃するといひそうだと。

「それじゃあ思い切っけていきますから。リンドウさんは遠くでゆっくりお茶でも啜っててくださいよ」

俺は調子に乗ってそんなことを口にしてしまう。訓練であれだけやったんだ、こんな奴、一人でも片づけられる。片づけられなきゃ、……俺は強いゴツドイーターに、なれないんだ。

「本当に大丈夫なのか？ 後悔しても知らんぞ？」
軽い口は、当たり前ですよと言った。

「……よし、分かった。危険が迫ったら手助けに行く、それまでは絶対に手は出さないぞ。それでいいんだな？」

リンドウさんの問いかけに縦に首を振って、俺はオウガテイルに『ノコギリ』を振りおろした。彼の手は、煩わせない。

「ちえっ、はずしちまったか。次は当ててる！」
突進をかわしてからのステップ、そして斬り払い。神機の刃が目標の足に入り込む。

……ところで、どうでもいいことだが。俺がショートでもロングでもなく、バスターを選んだのにはちゃんと理由がある。ちなみにレキには一瞬で看破された。

『強そうだから、だろ』

『な、なんで分かったんだ？』

『おまえの性格からすればその答えしか思いつかなかった。単純と

「いつか、浅はかだな」

一発ぶん殴ってやった。年上だからってなめるなよ、同期なんだからな！　そしたらやっぱり殴り返された。痛かった。

「バスターの大技と言えばチャージクラッシュだけど、うまくいくかな」

そう呟きながら剣に力を込める。バースト状態のときは早く力が溜まるってツバキさんに聞いたからな。自分に自信を持つと、絶対に決める　よし、決める！

「うおりゃあッ！」

だが、惜しくもその一撃は避けられてしまう。そしてから空きになった懐目掛けて、オウガテイルは針を飛ばした。

「は、針だあ？！　そんなことデータベースには載ってなかったぜ？！」

俺は針を辛うじてサイドステップで回避しつつもリンドウさんに目配せをする。あくまで、手を出さないでいるようだ。……要するに、自分で蒔いた種なんだから自分でどうにかしろってことか。

……てか電話してる？　電話してるよね！　なんでこんな時に電話なんかしてッ？！

すると突然、身体にえも言われぬ倦怠感が押し寄せる。バースト状態が切れてしまったようだ。それを見計らってか、オウガテイルの攻撃が激しくなってきた。

俺にしてみればとてつもなく危険な状態で、防戦一方、といった感じだが、傍から見ればあまりにも滑稽。舞台の上で踊る道化。

そして込みあがるのはこんな奴にも勝てない、という無力さ。どうすれば勝てるか、という思考が緩慢になってきている。

このままじゃどうにもならない、そう考えた俺は思考を回転させる。相手を足止めするには？ ホールドトラップ？ 駄目だ、仕掛けている場合じゃない！ ならばさらに耐えるか？ だがスタミナが足りない！ どうすりゃいいんだ、どうすりゃ！ 考える、考える、考える考える！！

「えっと、えっと、そうだ、えっと、せ、閃光玉！」

慌てるな。スタングレネードだ、閃光玉じゃない。自分にそう言い聞かせながら震える手先で何とかスタングレネードのピンを抜いた。そして地面に叩きつけて、急いで耳を塞ぐ。

敵が奇声を発し、よろめいた。チャンスだつてことは分かっているけど、それで、それでどうするんだ、攻撃する？ それとも一時退却？ ああ、落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着けお、ち、つ、けっ！！

「わッ?!」

俺が狼狽している隙にオウガテイルは飛びかかってきた。回避が間に合わず、俺はオウガテイルに押し倒される形で地に伏す。そして、その牙が左腕に喰い込んで、俺は苦痛な悲鳴を上げた。

「新入りイっ!!」

遠巻きで見ていたリンドウさんがついに耐えかねて駆けつけた。そしてロングブレードでオウガテイルを斬り払う。再びオウガテイルからは体液が飛び出して、彼のロングブレード 『ブラッドサージ』は真っ赤に染まる。……真っ赤な血と、青空の対比。そんな、どうでもいいことを考えてしまう。

そして、オウガテイルが倒れこんだ隙に、俺はリンドウさんに連れられてちょうどオウガテイル目標と反対の地点へ行く。そして俺は地面に倒れこんだ。

「リンドウさん。……思った以上ですね、あいつ……い、い、ただっ！」
死ぬほど痛いってほどの痛みじゃない。でも、擦り剥いた程度の痛みじゃない、……喻えるならば、包丁で指を切ったところに塩を塗りこんだような痛み。

強がってた俺が馬鹿みたいだ。戦場は、そこまで生温くはない。この痛みを以って、それは知らされることとなった。

「とりあえず傷を見せる。……よし、これぐらいなら大丈夫そうだ」
リンドウさんは包帯を取り出すと、器用に俺の腕に巻きつける。
うまいですねと俺が言ったら、サクヤさんに教えてもらったそうだ。そうか、サクヤさんは確か衛生兵だった。

「やれやれ……とりあえずこれでなんとかなるだろう。痛みは侵喰が原因だ、回復錠は持ってきただろ？ そいつを服用すればとりあえず侵喰をある程度は防ぐことができる。本格的な治療は帰ってからだ、今は我慢してくれ。」

……今さっきは、一人で行くことを許したが、その結果どうなったかは、分かるな？ 一人での戦闘は極めて危険だ。実戦経験のない奴がおいそれと行うのはよせ。……手遅れになられたら俺が困る。
俺は、お前らが所属する第一部隊のリーダーだからな。メンバー全員の命を背負ってる。だから、誰一人として欠かすつもりはない。新入り、お前らも含めて、な」

……この人、リーダーなんだ。そして、俺は彼の意志の強さに、感銘を受けた。さすが、ツバキさんの弟、いや、さすがリンドウさんと言ったところか。俺の目標が、一つ決まったような気がする。彼のようなゴッドイーターになろう。彼よりも、上を目指そう。

俺は回復錠をポーチから取り出して一錠飲む。リンドウさんの言

に喰いついた。狙いは完ペキだな、俺ってサイコー！

「よし、いい感じだ。もうすぐ仕留められるんじゃないか？ とどめぐらいは気持ちよく決めたいだろう、もうこいつは相当弱っているから思いつきり決めてやれ」

俺はリンドウさんが言っていることを察して、剣形態に切り替えて近づく。オウガテイルは起き上がるも、血のようなものを吹き出し再び倒れた（確か、フアンブルだったっけ）。それを尻目に剣に力を込め、今さっきの痛みに対する恨みを少し籠めて……思いつきり、振り下ろしてやった。

その一撃は、オウガテイルを真つ二つに切り裂いて、返り血を剣いっばいに浴びせる。

もう、オウガテイルは動かない。既に、生命上に必要な活動を停止している。……それでもまだ生きているのがオラクル細胞。そう思うととても恐ろしい。

「よし、……任務完了だ」

「できた。できたんだ、……俺。倒せたんだっ

……！」

血まみれの手で笑っている俺は狂っているのだろうか？ それとも、俺を狂わせるこの世界が狂っているのだろうか？ 武器を持って敵を討つことが正義なのだろうか？

そんな難しいことは、今はどうでもいい。ただ、俺は、勝利の余韻を味わうことを、楽しんでいた。

「あいたあー！」

「ん？ どうした、また痛みだしたか。それにしても、ここまで派手にやる新入りは見たことがないな。たぶん、おまえが一人目だ」

嬉しいようで嬉しくない。そりゃそうだ、褒めてるようには思えないし。

……と、ヘリが来る。いつの間にかリンドウさんが任務完了の連絡を取っていたようだ。

「ところでケイスケ。コアは回収したか？」

「……………あ」

辛うじて死体が残っていたからさつさと捕喰してコアを回収する。というか本来の目的はこっちなだから、忘れては困る。これで万事OK。俺たちはヘリに乗り込んで、アナグラへ帰投した。

0821 嘆きの平原

「榊レキ」

吹き荒れる嵐、気候は最悪。ジメジメとしている上に、少し肌寒い。雨足はそこまで強くはないが、俺たちの服を濡らすには十分な量である。

「橘さん、」

「あ、私のことはサクヤでいいから。それで、何かしら」

「それじゃあサクヤさん。……………雨が降ってない時の方が、安全に任務を進められると思うのですが」

俺がそう言うと、コウタが俺を小突く。なんだってんだ？

「知らないの？ ここ、ずっと雨が降ってるんだよ」

「そうなのか。……………それは初耳だな」

討伐対象のアラガミについてはしっかりと調べたが、肝心のフィールドについて調べるのを忘れていた。やはり俺は詰めが甘いなど、しみじみ感じる。

「それにしても変わってるね。時々このあたりで中継行われてるからさ、いつも雨が降ってることくらい知ってると思ってたけど……」
「悪いが、新聞は経済に関するもの以外は取っていない。あと、テレビはもう家がない。……正直に言うと、昨日エントランスで久しぶりに見たときは小さい頃が懐かしくなった。本当に、あの頃はよかったと思う、……あの頃は……」

場の空気が徐々に重くなっていくことをその身に感じ、サクヤさんが咳払いをしてくれるまで、俺の心の中はどんよりとしていた。

「あ、これはその……すみません」

「とにかく忘れる、もうすでにミッションは始まっているわ。マップを一度確認してみてください」

俺はポーチにあらかじめ入れられていたマップを取り出して、確認する。

「この矢印が、俺たちですか。腕輪のビーコンで位置を表示してるんですよね」

「そうよ。よく知ってるわね、結構調べたんじゃないかしら」

物覚えはいい方なので、あまり調べたわけではないが、一応『ゴッドイーター・ハンティングガイド』は一通り目を通した。……操作説明書ではないのは確かである。

「じゃあ、この赤い丸はなんだろ？」

「これがターゲットのアラガミ。ほら、ここから見えるでしょう？ マップだとあっちの方向だから、」

俺たちが向いた方向の先には、紡錘状のアラガミが見えた。このマップは常に腕輪（装着者）から視覚情報等を受信しているため、アラガミを視界内にて視認することができた場合、もしくは一定距離以内にアラガミが接近した場合、マップに表示される。逆にいえば視認できなければ場所は分からない。

その場合は超視界錠という薬品を使用するか、もしくは同等の効果を持つスキルのついたパーツを装着することで、腕輪の精度が一定時間向上するため、フィールド全体にアラガミの位置を確認することができる。

「……おい、レキ、レキい」

「ん？ なんだよ」

「ん、じゃないよ。何ぼーっとしてるんだよ」

コウタに呼ばれて我に返る。つい講釈垂れてしまったようだ。しかし、誰に話していたんだ、俺は？

「視認できる限りでは、渦を中心として三時の方向に一体、九時の方向に一体。・・・目標は三体だったような」

「渦の裏に隠れてるんじゃないかな、見えないだけで」

恐らくその可能性は高いだろう。そして、心身ともに準備はできたので俺たちが行こうとすると、サクヤさんが止めた。

「これはリンドウの受け売りなんだけど、一応言っとかなきゃね。

えっと、……『死ぬな』。『死にそうになったら逃げる』、『そんで隠れる』っ。運が良ければ……えっと、なんだったかしら。運が良ければ？」

しばらく考えた挙句、サクヤさんは携帯端末を取り出して通信を始める。誰かと話してみたいだ。

「……もしもし、リンドウ？ ……えっと、運が良ければなんだったかしら？ ……だから、リンドウがいつも言ってる、……そうそ

う、それよ。最後の運が良ければの下り。……そう、分かったわ、気をつけてね」

そう言って通信を終了する。

「運が良ければ隙についてぶっ殺せ、だそうよ。リンドウらしいわね、ほんと」

リンドウ上官と話していたのか。ということは、まさか既にケイスケたちは任務を終えているのか？ ……く、こうしちゃおれん、さっさと俺たちも済ませないと。

焦れる心を抑えて、次にサクヤさんは連携について話し始める。

「あなたがアラガミに張り付いて、援護射撃をコウタと私で行う。回復の方は私に任せて、しっかりカバーしてあげるわ」

「基本的に俺はバレットの方を多用しますが、剣の方も大丈夫ですよ」

俺の神機の刀身はショート。手数でカバーしつつ、消費したオラクルを回復する。そして銃身はスナイパー。射程もあり、貫通性能も他の銃身に優っている。文句無しでこいつが一番だろう。

「それじゃあ攻撃を交えつつも後退して撃つ、要するにヒットアンドアウェイだけど、それもいいわね。どちらでも好きな方で構わないわ。 ……さて、長話もおしまい、本気出していくわよ。時間はまだまだ余裕が、」

彼女が最後まで言い切る前に、アラガミの声が木霊する。 ……その声は禍々しいが、たった三体だし、小さい。 ……しかし、サクヤさんの顔が曇る。

「 ……ちよつと急いだ方がいいかもしれないわね。リンドウ的に言うなら、やばい奴が来ているっていうのかしら」

……どうやら、アラガミの声はこいつらではなかったようだ。その、『やばい奴』が来る前に片づけないとまずいらしいな。

「準備は万端だよ、サクヤさん」

「いつでも出られます」

そしてサクヤさんは笑みを浮かべる。それが合図だった。

「任務開始！」

「榊レキ」

「あと、一体だな」

「えっと、どっちだろ、……あれ、あれ？」

コウタは突然マップを見て焦っているようだ。あっちを見たり、こっちを見たり。一体どうしたというのだろうか。

「どうしたの、コウタ？」

「いやその、マップが訳の分からないことになってて」

自分のマップを確認したが、別に変なことになっている様子はない。コウタのマップを見ると、……ぐちゃぐちゃで、何が何だか分からない。

「まさかコウタ、壊したわけじゃないよな？」

「違うって！ 確か、このコクーンメイデン……だっけ。背後から攻撃してて、いきなり肋骨が飛び出してきたのを喰らった後から見えなくなっちゃって」

コクーンメイデンの肋骨には神経性の毒が含まれているらしい。

主に視覚に影響するらしいが、このような形で現れるとは驚きだ。

「これはきつと、ジャミングね。抗ジャミング剤は持ってるかしら」

「いや、そもそも渡されてないからどういふものか分からないよ……」

……

それなら自然回復を待つしかないと、サクヤさんは言う。溜め息をつくコウタに、俺たちがカバーするから少しの間我慢しろ、と励ました。

「　　ときにコウタ、一応言っておくが。……助骨じゃない、肋骨だ。読み間違えないよう気をつけることだな」

コウタが信じられない、と言いたげな顔をする。まあ読み間違いは誰にでもある。

「さて、残すは後一体。『やばい奴』が来る前に早く片付けよう。捕喰して十分にアラガミバレットも溜まっているから、有効活用させてもらうとしようか。サクヤさん、後ろは任せましたよ」

「了解よ」

俺は軽い足取りでコクーンメイデンに近づく。向こうもこちらに気づいたようで、ジャベリンを飛ばしてきた。それをステップで回避し、背後をとる。

4回の切断攻撃からの銃形態への変形、そしてレーザーを1発ぶち込んで、反動で全方位攻撃をかわす。ここまでは思惑通り。さて、あと何回繰り返し返せば倒れるだろうか？

その時、背後から自動ホーミングレーザー弾とホーミング通常弾が、数発ずつ飛んでくる。援護射撃か、これはありがたい。さあ、次はどう攻めるか？

……コクーンメイデンは攻撃してこない。ならばこちらから仕掛けよう。まずは、ジャンプ3回斬りからの急降下突き、再び3回斬り、そして捕喰。バーストモードに移行して、さらに攻撃の手を早める。為す術もなく、コクーンメイデンは腹を開いてダウンする。

さて、俺ばかり活躍するのは気が引けるな。

「コウタ！ リンクバーストは知っているかッ?!」

「うん！ それがどうしたのっ!?!」

俺はジャベリンを2発、受け渡す。コウタはそれを受け、リンクバースト状態になった。

「これが、リンクバーストね。初めてみるけど、コウタ、大丈夫？」

「はい！ よおし、みなぎってきたー!!!」

変に調子に乗り始める。それだけ、リンクバーストの力は恐ろしく強大なのだろうな。そして、コウタは力を込めて、引き金を引いた。

「すごい喰らえーッ!!」

最早頭のねじが緩みかけているレベルではあるが。『濃縮ジャベリンレベル2』は天を貫き、コクーンメイデン目掛けて地ごと貫く。

……その一撃でコクーンメイデンは力尽きた。

「すごい威力だな、……間近で見ている、恐ろしいと感じるほどだ」
それにしてもこのコウタ、ノリノリである。俺は一通りの捕喰を済ませて、迎えのへりを待つことにする。

「もうすぐ来るみたいだけど。」

ところでサクヤさん、さっき

言ってたやばい奴って何？」

「いずれ戦わざるをえない時が来るかもしれないから話しておくわ。」

……そいつは、ここ嘆きの平原にしか出現することはないの。その名は、ウロヴオロス」

名前からして、おどろおどろしい。肝心の見た目の方はどうなのだろうか。

「体躯は悠にこのフィールドの大部分を占めるほどね。高さもそれなりにあるわね」

「っ、大きすぎるっ……！ 確かに、そのようなアラガミが出たらひとたまりもないな……」

出会ったら即刻逃げなければ危険だ

む？ この赤い小さな

四角はなんだろうか？

「この四角？ ターゲット以外のアラガミよ。……それってまさか」

俺は、いや、たぶんここに居た全員が何かに祈った。予想が外れているようにと。しかし、やはり神なき時代に願いを聞くものなど、……いないと言っことを思い知らされた。

ドズン、ドズンと、背後から地鳴りが響いて、足がガクツとなる。まさかとは思ったが、ゆっくりと、ゆっくりと俺たちは振り向いて振り向いて、振り向いて振り向いて振り向いて振り向いて。

その体軀は確かに巨大で、俺たちの手に負えないことは明白であった。

「へりはまだかしら。もうそろそろ来てくれないと、困るわね」

「リンドウさんは確かなんて言っていましたっけ？ よし、コウタ。言ってみろ」

「うん。逃げるな、」

「それは違う」

逃げなきゃ死ぬだろうが。っと、そうこう言ってる際に、ウロヴオロスはこちらへ向かってくる。太刀打ちできるわけがない。だから俺たちはリンドウさんの受け売りで、戦略的撤退を決め込んだ。

地面から襲い掛かる触手のようなものを避けながら走る。どこまでも、どこまでも奴は追ってくる。幸いあまり速度はなさそうなので円形状のステージをレースゲームのごとく駆け回る。時々方向転換をしながら逃げ続け、目が回りかけた時に、待ちわびていたへりが到着したのが確認できた。

「はあ、ふう、……やっと来たみたいね」

「ハア、ハア……た、助かったあゝ」

「……がふあつ、げほつ、……や、……やっと、うごほつ、……き、来たかつ……げほつ、ごほつ……」

「レキ、大丈夫？ 息が大変なことになってるみたいだけど」

まずコウタが、次にサクヤさんはコウタが手助けしてもらって、最後に俺は二人に手伝ってもらって（実質引き上げてもらったわけだが）、高台に上る。そしてへりは平原を去った。

ヘリが飛び立って、ようやく息が整ったところで、俺は思ったことを口にする。

「いずれ。……いつかは分からないが、いずれ倒すべき相手になることは、間違いないな」

「ええ。そのためには、たくさん経験を積む必要があるわね」

いつか、あいつを倒して、
答えを見つかる。俺が選んだ道が誤っていなかったことを証明してみせる。

「ひくしょい！」

と、コウタがムードをぶち壊す。というか、少し寒いな。吹き込む風が冷たい。

「濡れたままでいると風邪ひくわよ。はい、タオル」

サクヤさんにタオルを渡された。これはありがたい。……それにしても、ヘリコプターに乗ったのは今日が初めてなのだが、ドアがこんなに簡単に開くとは思わなかった。下を見ると本当に生きた心地がしない。このまま落ちてしまうのではないかと、少し不安になる。

「今日の辺りにいるのかな？ うわっ、瓦礫ばかりでよくわからないや」

コウタがそう言ったので俺も窓の外をみることにする。コウタの言ったとおり、よく分からない。この地に本当に昔、人が住んでいたのかすら、疑われるほどである。

ん。それにしても、……気持ち、悪いッ……。

「とにかく、みんな目立つような怪我もしてないし、よかったわ。

次もこの調子でいきましょうね」

「うん、それじゃあ次も頑張ろうぜ、レキ
あれ、どうしたんだよー、レキ？ おーい、大丈夫？」

そしてしばらく、俺は乗り物酔いの恐怖と苦痛を味わうことになった。

2・OPEN FIRE（後書き）

さてさて、ようやく新型2人が初任務ですね。サクヤさんに今回は協力していただきました。ありがとうございました！。

この流れ、次回はまさか例の人物が登場するか！？ さて、生きるか死ぬか、全ては頭上にかかっている！！ 次回、『華麗なるエリック伝説！』、お楽しみに！

冗談です、すみません。しかし、次回には登場するはず。もちろん任務へはあのキャラも同行するからね。あとは新型キャラももう一人投入すれば豆乳鍋の出来上がり。

それでは次回まで。

3・STRANGER

*** 輸送用へり内

「N/A」

……オレは目を閉じる。……何も見えない。ただ、バラバラとロ
ーターが高速で回転する音だけしか、聞こえない。……本当に退屈
だ。

オレは、操縦士に現在地について質問する。彼曰く、現在患者の
空母の上空を通過中らしい。目的地まではまだまだのようだ。

仕方なくオレはヘッドフォンを耳に当てて、再生ボタンを押した。
……だけれども、邪魔な音は消えない。

やっと、戻ってこれた。長かった。本当に長かった。何度悔やん
でも、この心が癒えることはないだろう。謝ってももう遅い。……
オレが強ければ、あんなことにはならなかった。

これからやることは、復讐。ただの自己満足。それでも、
『彼ら』の弔いになるのなら……自らの手を血に染めることは厭わ
ない。それが、『オレたち』の罪だから。

不意に機体が揺れる。俺は目を開いて、辺りを見渡した。

……どうやらアラガミの襲撃のようだ。ザイゴート数体、それら
を統率しているのはサリエル、いずれも墮天種ではない。へりに備
え付けられた対アラガミ迎撃用オラクル銃も、ここまで多ければ相
手にできそうにない。

死の覚悟？ そんなものはいらない。ここでオレが、オレ
タチが死ぬはずなど、ないのだから。

……『彼』はこんな時でも悠長に寝ていられる。そして、サリエ
ルのレーザーが操縦士を貫いて、ザイゴートたちは機体前方を一斉
に捕喰する。

動力を喪失したヘリは重力という物理法則に従って、殺伐とした
大地へ、空母へと落下していく。

この高さから落ちてしまえば、間違いなくこの地に肉片一カケラ
余さず捧げることになるな。回避するには、タイミングよくヘリか
ら飛び降りる必要があるだろう。運が良ければ骨の一、二本で済み
そうだが、タイミングを外せばオレタチはまず死ぬな。

と、『彼』がようやく目を覚ましたようだ。そして、事態
の深刻さに少々焦っているようだが、幸いにもオレタチは、身動き
がばっちりとれる。

そして、地上が見えてきた。オレが地上に近づいているのか、地
上がおレにぶつかって来ているのか。そんなことはどうでもいい。
ただ、オレタチは生きるために……死ぬために、生きている。寿命
を削ってまで、生きて、死のうとしている。

「 本当に、莫迦野郎だよ、……オレタチは」

本当に馬鹿だなあと、『彼』に嗤われる。別に構わない。生きる
ためなら、莫迦者と罵倒されようが、痛くも痒くもなんともないか
らな。

そして地上がおレの目先10メートルほどになる寸前に、オレタ
チはヘリから飛び出した。舞い降りるようになって、そんなにきれ
いには降りられるはずがなく。だから、どしゃつと足から、そして
ガクツとへたり込んで頭を突っ込んで、……ガシャンと大層な音と

ともにヘリが落下して、それでおしまい。

そして、破れた燃料ボックスに火花が散り、大炎上。あとはこの血塗れた体がどれだけ持つか、そして誰かがあとどれくらいいたら来るかだが。

「あの、何か落ちる音がしませんでしたか？」

「そうか？ 別にそれらしきものは」

オレは運がいい。既に誰かが近くにいたようだ。だから、安心してオレは四日ぶりの睡眠をとることにしよう。それじゃあお休みなさい、また誰かが起こしに来るまでオレは寝る。というか、頭を打ち付けた衝撃で、意識が朦朧としていて、うつらうつらとしてきた。

「だ、大丈夫ですか?! えっと、そうだ、……」

……騒がしい奴らだな。そう思ったのを最後に、意識を保つていることが耐えられなくなって、オレは再び目を閉じた。

0857 自室

「睦月ケイスケ」

帰宅して、報酬を頂戴して、ツバキさんの話を聞き流して、病室で手当てをしてもらって、エレベーターで新人区画まで行って、ドアを開けて、……ようやくベッドに倒れこむ。とっくにスタミナは切れかけていた。まあ少し休めば回復したわけだが。

朝食は既に摂ったし、1時間後にはサカキ博士のありがたいお話があるそうだが、それまですることは一切ない。眠気があるわけでもないから、とりあえずその辺をぶらりと歩くことにする。ついで

に、あいさつ回りというのもいいだろう。

そして部屋を出て、……新人区画の静けさに、少し不安を感じた。とりあえずエントランスで時間をつぶそう。そう思って、俺は自室の扉の鍵を閉める。

0900 エントランス

「睦月ケイスケ」

ソファで座って寛いでいると、誰かが来た。えっと、確か彼の名前は　　タツミさんだったっけ。

「ん？　ああ、新入りの。ケイスケだったな、確か」
名前を覚えてくれて助かった。そして、俺の腕の傷を見て少し心配しているようだ。

「大丈夫ですって。ただのかすり傷かすり傷、あいたた」
あの程度の侵喰ならもの数日で完治するらしい。だがあまり無理をしないことが大切だそう。ごもつともである。

「そういえば、ここへ来た時からずっと気になってたんですけど。そちらの女性は？」

受付にいる女性だが、彼女は何をしていて、誰なのだろうか。タツミさんが答えようとすると、彼女が直接答えてくれた。

「私はここフェンリル極東支部のオペレーターを務めています、竹田ヒバリです。ミッシヨンの受注や外部・内部からの通達などは私がすべて承っております。何かあったら気軽に声をかけてください
ね」

ヒバリさんの顔を見る。そして、タツミさんの顔を見る。
そして、またヒバリさんの顔を見る。

「……いや、ないか」

「何がだッ！！」

タツミさんに突っこまれた。そういう反応をしたってことは、やっぱり二人の関係って、

「ん？ あ、はい。……そうですか、分かりました。それでは。……どうやら残りの二人も帰ってきたみたいですよ。ちよっとした災難に遭ったみたいですけど」

「災難？ やばい敵みたいなのが出たとかそんな感じかな……」

俺がそういうと、どうやらビンゴだったようだ。ウロ何とかわつていうアラガミに追っかけられたらしい。そりゃ災難だ、よく分からないが。

と、ゲートが開いてサクヤさんとあいつらが入ってくる。

「くっ、やはり既に帰っていたのか。しかし、俺たちがミッションに出ていた場所の方が遠いから当たり前だな」

何負け惜しみみたく言ってるのさ。

「あれ、怪我してるみたいだけど……大丈夫？」

「まあ、別に軽いケガだし、つば付けときゃ治るさ」

そして、サクヤさんがツバキさんのところへ一緒に報告に行きましようとして声をかける。そして、一時的だが別れた。同時にタツミさんも自室に戻るようなのでエントランスから離れる。

カタカタとキーボードを打ち雑務に追われるヒバリさんと、ソファアに座って暇を潰している俺。打鍵音と、自動販売機とターミナルの稼働音以外、何も聞こえない。……そして、ピリリと連絡が入ると同時に、リンドウさんが外から戻ってきた。どうやら煙草を吸っていたようで、少し煙臭い。

リンドウさんは俺に、お疲れさんと言った。だから俺もお疲れ様でしたと返した。

「で、今回のミッションはどうだった？」

「あ、えっと。……やっぱり、頑張らなきゃなー。あと、自信過剰にも注意　　みたいところで」

そして彼は、気楽に頑張ろうや、と励ましてくれた。気楽にできればここまで苦労はしないんだけどなあ……。

と、通信を終えたヒバリさんの顔が険しくなった。

「どうしたんだ、ボーイフレンドと喧嘩でもしたのか？」

「そんなんじゃないかもしれませんっ。……地下の対アラガミ装甲が破損していたようなんです。何か良からぬものが入ってきていなければいいんですけど……」

良からぬもの。まあアラガミのことで間違いなさそうだな。

……リンドウさんも自室に戻るようだ。またエントランスは俺とヒバリさんの二人になってしまう。さすがにいつまでもエントランスで時間を潰すのは不精だと思って、俺も自室に戻って退屈な時間をテレビでも見ながら過ごすことにする。

「　　ん？ エレベーターが来ないな」

壊れてしまったのだろうか。しばらく待ってみたが、やはり来そうにない。

「技術開発部に連絡入れときましようか？　　すぐに修理に來ると思えますよ」

「ああ、そうしてくれるとありがたいが　　お、やっと来てくれたみたいだ」

「うーん、何か嫌な予感がする」

そう思いながらドアが開くのを待った。……そして、ドアが開いたので中に入ろうとする。

「あれ？ なんだこいつ」

こけしのようなドでかい何かがぼつんと一個。リンドウさんは俺の腕を引っ張ってそいつから引き離す。そしてドアが閉まると、…鋭い棘のようなものが、金属のドアを貫いた。

「な、なんだあれ、も、もしかして、あ、アラガミ……？」

「ああ。あいつはコクーンメイデン。まあ、小型のアラガミだから脅威は小さい。だからと言って油断していると痛い目にあるから、気をつけるよ」

そしてリンドウさんが神機を持ってきて、サクツと倒してしまっちなみに、こいつ　コクーンメイデンは、一体出てきたら十体は出るらしい。こいつがまだ九体はいるかと思うと、少しぞっとする。

忘れてしまった方がよさそうだ。とにかく、自室に出てこないことを祈る。

0948 エントランス

「榊レキ」

「なんだというんだ、怖いというべきか心臓が止まりかけたというべきか……」

「寿命が一、二年縮んじゃったよ……」

ツバキ上官と話していると、突然間からぬつとコクーンメイデンが生えてきた。ツバキ上官がサンドバッグよろしく殴ったらしばらく気絶してしまったようだ。ツバキさんって本当に人間なのだろうか？ 無論、そのあとは俺の神機で駆除しておいた。

た。

「な、君は神っ！　なぜ君がここに　　そ、その腕輪はっ！！」
わざわざしつかり見えるように腕輪を見せてやる。驚きっぷりが懐かしくて、そんな彼が見れて少しうれしかった。

「今では俺はお前の後輩だがな。けどよ、昔と変わらない関係でいようぜ」

そういうと少し機嫌がよくなった。すぐ調子に乗るとこれだ、お互い様だが。まあ憎めないからよしとする。

コウタが少しこちらを見ている。　　彼とは大抵インフォーマルな話し方をしているから、意外だったのだろう。

「知り合い？」

コウタが俺に訊いてきたから、俺はエリックに自己紹介を促した。
「僕はエリック。エリック・デア」フォーゲルヴァイデ。もちろん、君の上司であり先輩さ」

「こいつとは昔っからの付き合いでだな、……まあ正直言っちゃあ腐れ縁なわけだが」

たまたま家が近所で、たまたま親同士の付き合いが多かっただけだ。だが、たまたま遊んでいたわけではない。お互い遊び相手として十分気に入っていた。もっとも、年齢が近かったという理由もあったわけだが。

昔は、射撃勝負と称してモデルガンを二丁持ってきて、缶や瓶を撃ち合ったものだ。ちなみにはば互角だったが、勝った回数は微妙に俺のほうが多い。

ときどき友達全員で集まってサッカーをしたが、知識だけの俺は全くダメダメだった。こいつにはいつも負かされたものである。エリックシュートは俺たちの中では『最強の必殺技』だったわけだ。もう一度聞いてみたいものだ。

「とりあえず、よろしく願います、……えっと、」
「僕のことはエリックと呼んでくれて構わない。もしミッションと一緒にいることがあったら、露払いは任せたよ」
相変わらず上から目線である。そしてプライドも人一倍でかくなっているみたいだ。でも、変わらないでいてくれて、少し安心した。

「……ところで、一つ聞いていいか？」

「ああ、構わないさ。何でも聞きたまえ」

フォーゲルヴァイデが入隊したとき、窓の外からその様子を見送った（直接見送りはなかったが、『勉強の時間』のおかげで許されなかった）。だが、一緒に、近所の『あのガキ』がいるのを見た。そして俺は理解した。あのガキも、入隊するのだと。

「あのガキ、どんな調子なんだ？」

「あのガキ……、あ、ああ、彼のことが。元気そうだよ」

フォーゲルヴァイデは、少し言葉を濁す。コウタは『あのガキ』が誰か分からないようだ。俺たちだけの内輪話だから仕方ないか。

と、そこへダルそうな顔をしながらケイスケが現れる。

「あー、やっぱ自室は退屈だーッ！ お、レキ、コウタ、……と、こっちは誰だ？」

「僕はエリック、エリック・デア」フォーゲルヴァイデさ。君の先輩で、彼の知り合いさ」

簡素な自己紹介を済ませた（これでケイスケが納得するかどうかは別として）エリックに、ケイスケは握手を求めた。

「君も、僕を見習って華麗に戦ってくれたまえよ？」

そしてエリックとケイスケの手が触れる。

が、ケイスケの手は不意に払われた。誰に？ ああ、『あ
のガキ』以外の誰でもない。

「師匠の弟子は、俺だけだ」

……無論、フォーゲルヴァイデがこいつを弟子に取っているわけ
ではない。こいつの思い込みだ。

「ヨシツグ。……まだ君を、弟子に迎えてはいないし、弟子にする
つもりもない」

「なら、今すぐ弟子にしてください。師匠のその、華麗なる伝説に
俺は、魅せられてしまった！ だから俺は、俺は師匠の弟子なん
です」

何を言っているのかさっぱりだ。こいつ、俺が見ない間に一体ど
うしてしまったんだ？

いや、彼のフォーゲルヴァイデに対するあのような態度は、今に
始まったことじゃない。彼は昔からそうだった。誰彼構わず見下し
たが、フォーゲルヴァイデだけには、いつも尊敬の念を込めて接し
ていた。実際、当のフォーゲルヴァイデもこんな感じ（いや、ここ
まで酷くはなかったか）だったせいもあるのだけれど。

しかし、ここまで彼が歪むとは……一体俺の居ない数年の間に、
何があったというんだ？

「何度も断ったじゃないか、確かに僕は師となる器であると自負し
ているさ、君も僕を師にあおぐ器がある！ だが、君と僕とは方
向性が全くと言っていいほど違う……！ ……すまない、どうか、華
麗なる僕を許してくれたまえ……」

何とも思いがりである。少々自惚れすぎてないか？ ……たぶ
ん建前だな、建前に違いない。

そしてしばらく経って、ギリリと歯ぎしりが聞こえた。彼は背を

向ける。

「絶対に、弟子になりますから。師匠」
そう言って、エレベーターを待つ。そしてケイスケは問う。

「どうして彼を弟子にしてあげないんだよ？ 形式上でも弟子にするって言ったほうがよかつたんじゃない？」

「彼の神機はアサルト。それに対して僕はブラストを使って数多の華麗なる伝説を作り上げた。僕には、彼に教えることなど、……教えられることなど、一つとしてないのだよ……」

一瞬、奴の体が強張るのが見えた。……そしてドアが開いて、吸い込まれるようにして彼はエントランスを去った。

「なあ、あいつ誰なんだ？ 華麗なエリックはヨシツグって呼んでたけど」

『華麗な』を付ける必要性について問いたいが、質問を質問で返すのは失礼にあたる。

「前田ヨシツグ。ケイスケたちと同じ年だ。フォーゲルバイデと一緒に彼は入隊し、今まで戦ってきた。……さすがに、俺は彼がここでどのようなことをしたかは知らないがな」

フォーゲルヴァイデに彼について聞こうと思ったが、主観的になつてしまいそうだから、あまり会話をすることのないと思われるオペレーターのヒバリさんに聞いてみた。

「え？ ……そうですね。彼に私もよく苦労させられます。何かと難癖をつけることもあれば、ないものねだりをする。オペレーターは機械のように黙って人に言われた通りのことをしていればいいと言われたこともありますし……」

彼らは、彼がどのような性格をしているか、よく分かったようだ。「恐らく、奴はこの支部のほとんどの奴を敵に回してる。親の七光とは言ったものの、時代錯誤が甚だしいな」

「ななひかりつて、なんだそりゃ？ 臨兵闘者皆陣烈在前？」

「ケイスケ、それは九字だ」

「なんというマニアックなものを……ニンジャというものに興味があるのだろうか？」

「必殺技みたいなものだよ、必殺・セブンスパーク！ とか」

「……呆れてものも言えない。ネーミングも少々陳腐だ。」

「華麗な僕が説明しよう。ヨシツグの祖父は、ここが日本と呼ばれていた頃、内閣という政治機関のトップ……要するに大統領のようなものだった」

「ダイトリョー！ ひえーっ。そんな奴の孫だったとはびっくりだぜ。……で、あいつが偉ぶってるのとどうい関係があるんだ？」

「それを聞く限りじゃ、天狗になってるとしか思えないな」

「要するに、そういうことだ。もう、この国 いや、この世界に、トップに立つべき人間など、居ても居なくても同じようなものだからな。実質ここが日本だとすると、トップはここアナグラの支部長だろう」

「　　っと、もうすぐ博士の講義の時間だよ。研究室へ行かないとね」

「それじゃあ、また後でな」

「俺はフォーゲルヴァイデに手を振って、ラボラトリへと向かう。今日の講習はどんな話になるのだろうか？ 楽しみで仕方がない。」

1023 エントランス

「雨宮リンドウ」

一服して、戻って来てみると少し騒がしいことになっていた。なにやら輪のような人ばかりができています。

「どうしたー、何があつたんだ？」

サクヤがこっちに気付いたようで、見てないで手伝いなさいよと言われた。

「いや手伝えつたつて。一体何があつたんだ？」

すると当事者のカノンは、何があつたかを短絡的に口走った。

「そ、空から、空から降ってきたんですよッ！」

空から降ってきた？ 新種のアラガミか？ それとも、救世主か？ ……そんなものはいないか。

なんとか見ることが叶ったわけだが、一人の青年が倒れていた。

……まだ幼さが残っている。子供であることは間違いない。そして、腕輪を見る限り神機使いであることも分かった。

「えっと……その神機使いは誰だ？ その降ってきた奴にでもやられたのか？」

とりあえずぐったりとしている彼を指して尋ねる。降ってきたものにぶつかるなんて、相当運が悪いんだろうな。

「違いますって！ だから、彼が降ってきたんですよー！！」

「何言つてんだ、冗談はよせやい」

「リンドウ、これは本当の話よ」

サクヤにたしなめられ、とりあえずはまず彼女の話の聞くことにする。

彼女が言うには、フェンリルが所有する輸送用ヘリの残骸のそばにいたそうだ。アラガミに撃墜されたようで、近くにいたアラガミはすべて掃討したらしい。

操縦士はすでに捕喰されていたが、彼はこのとおり無事だった。そこへヒバリが新しく入った情報を話す。

「ヘリコプターは操縦士のIDから南米支部のものだと判明しました。この青年についても現在問い合わせています」
さすがここ極東支部のオペレーター、対処が早いな。自分のことのように思えて鼻高々だ。

「リンドウ、彼を病室に運ぶのを手伝ってくれるかしら」

そういうのは若い奴に任せておけばいいものを。……まあ、俺もまだまだ若い。しかし、直々に指名されたのだから仕方ない、諦めて手伝うことにする。

「妙に厚着だな。確か南米地帯の気候は著しく暑いと聞いたが、脱がせてやった方がいいんじゃないか」

「確かにそうね。あら」

上着を一枚めくると、もう一枚パーカーを着ていた。それはいたって普通である。……だが、そのパーカーには、グルグルと何重にも『鎖』が張り巡らされていて、鎖のそれぞれに錠前が「一、二、三」とついていた。それは、喩えるならばそう、『封印』。

「近頃のファッションって、変わってますね」

「これはファッションじゃないと思うわ。……ほら、ソーマも手伝って」

「断る」

本当にこいつは。……だが、彼も人の身だ、いつか打ち解けてくれるに違いない。

彼が『死神』と蔑まされる日も、……終わってくれるに、
違いない。

「睦月ケイスケ」

「遅いな」

「なあにがちよつと出ていくだ！ 大人のちよつとはこれだから信用ならない！」

早くも痺れを切らした俺は研究室を出る。そして、たくさん人が集まっている病室を確認しに行った。

「ちよつと待つてよケイスケ、講義嫌だからラッキーって言ったのはどこの誰なんだよ！」

「こいつの心は秋の空並みに変わりやすいな。 ん？ こいつ、誰だ」

頭に包帯が巻かれていて、足にテーピングがされている。そして、左腕に腕輪が確認できた。

「神機使用いか。でも異動の話とかは一切聞いてないな。博士は知っていたんですか？」

「ん？ ああ、彼の異動かい？ 知っているよ」

「知っていたんですか。俺たちには伝わっていませんが……。それに、このような大怪我をするなんて」

異動の際にこんな大怪我をすれば、やはりヘリがアラガミに襲われたのだろうか。よく助かったな、すごいすごい。

と、リンドウさんが姿を現した。

「上様、もとい支部長が伝え損ねたみたいだ。しかし、どこか様子がおかしかったようだが……」

なんだ、そういうことか。宣伝部長もおつちよこちよいだな。そして、リンドウさんは他にも彼についての情報を話した。

彼の名前はウィラード・カーライル・シヤムロック（長い名前…

…）。愛称はウィル（こっちはこっちで短くて言いやすい。仲が良くなったらぜひそう呼びたいな）。性別は男（見りゃ分かる）。

俺とレキと同じ新型神機使い（同じ支部にこんなに居ていいのか？ 確か新型は稀少とか言ってたけど）。ただし腕輪が左についていることからサウスポールのようだ（珍しいなあ）。

異動前は南米支部配属（確かすごく暑いんだっただけ。俺だっただけで絶対行きたくないな）。相当な戦績を収めていたようで、彼を手放すのは相当惜しかったようだが、彼が行くことを望んでの決定だそう（一度どんな戦い方か見てみたい）。趣味は音楽（音楽プレイヤーには俺が聞いたことのないような曲ばかり入っている。えっ、これは何語かな？）と、寝ること（寝ることが趣味って……）。

「それで、やっぱりケガの影響で意識を取り戻さないでいるのかな？」

「見る限り血色はよいようだが。……てか今一瞬いびきが聞こえたような。」

「ただ寝ているだけだ。あちらさんの話によると、こいつ四日間ぶっ続けて任務に行っていたらしい。ベテランの俺が言うのもなんだが、よく精神がもつたな」

歳は、身長からして俺と同じくらいだと思う。本人が言わないと分からないが。それにしても、四日間も戦い続けたただなんて。俺だっただけと一日ともたないかもしれない。

「とりあえず君たちは研究室に戻ってくれ。講義を再開するよ」

「あ、すっかり忘れてた。でも博士、エイジス計画の話はもう聞き飽きたって」

俺がちよつと文句を言うと、博士はやはり笑顔で言う。

「まあまあ、これから面白い話が始まるから、期待して聞くようにね」

「オトナツて、ヤツぱりそういうところで嘘つくんだよなア」

「……レキが言ったかと思っただが、彼は言っていないよ
うだ。……この場にいた誰もが、誰がその言葉を発したか分からな
かった。例の彼かと思っただが、高いびきで完全に寝ている。寝言か？」

「……まさか、な」
「ほらほら、お前らも帰った帰った、ここは見せ物屋じゃないぞ」
次々とリンドウさんに追い返されていく野次馬。それに続いて俺
たちも退室して、再び研究室で博士のあまり面白い話を聞かされ
ることとなった。レキはとてもよく聞いていた。不思議不思議。

1 2 4 3 自室

「睦月ケイスケ」

「んつくんつく、……ぷはあ」

息抜きのコーラはやっぱりうまい。

「ケイスケはコーラが好きなんだな」

「そりやもし飲めるのなら十本でも二十本でも飲むほどにな。さす
がにそこまでは飲めないが」

飲めないなら言うなつ、と突っ込まれる。ちなみにレキは炭酸が
苦手だとか。普段何を飲んでいるのかと聞いたら、どうやらコーヒ
ーらしい。大人っぽくて少し憧れるなあ。……だけどコーヒの苦
さが好きな理由がちょっと自分には理解できない。

「たいていこの自販機でコーラ買っていくんだよね。あ、
ほらあの人も絶対コーラ買うね。断言できるよ」

フードをかぶった男。レキは絶対にありえないと言い切ったが、……彼はコーラを買った。

「な、言ったとおりだろ？」

「何がだ？」

ぎろりとこちらを睨んでくる。いや、その、……悪かったというか、うん。俺は目をそらした。

……鼻であしらわれると、次に彼はレキのほうを見る。そして彼に歩み寄った。

「そのルーキー。名前は　　どうでもいいが、ミッションに行しろ。……そういう命令だ」

名前がどうでもいいって言うのは俺でも少し腹が立つ。名前は大切な家族から貰った宝物だからな。

「ええ、……はい」

「早くしろ、エリックたちが待っている」

とりあえず腑に落ちない表情をしながらも、レキは男に付いていった。

「……誰だあいつ」

「おいおい、行っちゃったぞ、止めなくていいのか？」

「そんなの迷信だ、ただの噂に引っ張りまわされるなよ」

後ろから会話が聞こえたので、ちよつと振り返ってみる。

「あ、よお。お前、新しく入ってきたやつだよな」

「あ、あ、うん。そうですけど」

とりあえず二人は自己紹介する。別に訊いたわけでもないつてのに。こっちはこっちでおかしな奴らだなあ。

とりあえず、シレッとした方がカレルで、子供っぽい（人のことを言えたわけではないが、なんとというか年不相応というか）方がシユンというらしい。

「んで、止めなくていいって、何かまずい任務にでも付き合わされるとか？」

「まあそんなところだな。なんせあいつの任務の同行者は、」

「だからそれはただの迷信、偶然だ。そんなものを信じているだなんて馬鹿馬鹿しいな」

それを聞いてシユンはカレルに突っかかる。喧嘩ならよそでやれよ。

「あいつと同行してるのが死神っていう時点でやばいんだよ。ほら、フードかぶった男だ、分かるよな？」

「はあ、死神？ んなバカな」

「ああ、こいつはバカだ。偶然同行した奴らが戦死しただけのことを、勝手に面白おかしく囃し立てやがって。戦闘中の不注意で死んだだけだから、あいつがどうこの話じゃないと思うんだがな」

「いや、俺が囃し立てたわけじゃねーよ。俺も誰かが言ってたからそうじゃないかと思っただけで……」

本格的に口喧嘩が勃発。とりあえず俺はさっさと退避することにする。

「……死神、か」

確かに、あの眼光は怖かった。人間の心地がしなかった。……もちろん、シユンの言ったことを信じているわけじゃない。……もしかすると、ただ信じたくないだけかもしれない。あの男は、本当に死神なのだろうか？ あるいは……。

心配になった俺は、とりあえずあいつの無事を祈ることにした。

何に祈ったのだろうか？ 神亡き時代に祈る対象など、いる筈がないのにな。

「榊レキ」

「フォーゲルバイデも同行するのか」

「榊、昔から言っているが、君は正しい発音もできないのかい？」

僕の名前はエリック・デア・フォーゲル『ヴァ』イデだ」

「だからちゃんと喋ってるじゃねえか、フォーゲルバイデだろ？」

「だから よし、榊。ヴァイオリンと聞いたまえ」

「いいぜ、言つてやるよ。ヴァイオリン」

俺はとりあえず付き合つてやることにした。

「ヴァイデオ、ヴォイスパーカッション」

「こんなことをさせる意図が分からないな。ヴァイデオ、ヴォイスパーカッション。どうだ、満足したか？」

理由はもちろんわかってる。そして、彼は一呼吸おいて言った。

「フォーゲルヴァイデ」

「フォーゲルバイデ」

「……もういい」

拗ねてしまった。彼を弄るのは面白いな……だがちょっと刺激しすぎたか。

「ところでだ、フォーゲルバイデ。あの男は誰だ？」

「ああ、彼は」

「そろそろ時間だな。……おい、一人足りないぞ」

フードの男が苛立たしく言う。俺とエリックと彼の三人じゃないのか？ 確か一度の任務につき最大4人までだったが、あと一人来るということか。

「……で、その一人が来ないわけか。時間ぐらいは守ってくれなくては困るな」

そして、『彼』は来た。

「すでに時間は過ぎてている、前田。時間ぐらいは守れ」

それ俺のセリフそのままじゃないか。しかし、よしとする。……いや、よくない。どうして同行者がこいつなんだ？ 納得いかないな。

「俺自身が志願したんだ。悪いってのか？」

「ああ、悪いな。自分から申し出たのなら周りの奴のことも考えろ、ガキが」

すると奴は鼻で笑った。……そうか、俺のほうが階級が低いうえに、経験の差、だろうな。しかしながら、それとこれとは話が別だ。

「ところで、フォーゲルバイデ。お前、確か頭をよく打っていたよな。サッカーの時だって当たり所が悪くて失神していたしな。というわけで頭上に注意だ。俺のワンポイントアドバイス」

「な、失敬な！ サッカーの件にしる全部君がやったことじゃないか！」

否定する気はない。確かにさ、サッカーは苦手なんだ、こんな俺を許してくれ。

とうとうフードの男がキレた。待たせすぎたもんな、さっさと行くとするか。

1252 神機整備室

「榊レキ」

俺たちが使っている神機は、ここで整備されている。出発前にここで神機を受け取って、帰投後にここへ渡す。整備が行われなければ

ば、神機もすぐに壊れてしまう。ここで働く人たちは、陰ながら俺たちの活動を支えてくれていているわけだ。

「レキさん？ もしもしー、早く神機持っていきなよー」

「あ、あ、……すみません」

彼女は楠リツカ、ここで働いている。若くして働き出したため、その腕前は計り知れない。

彼女と初めて会ったのは、入隊当初（あの日のことは忘れない）、病室で目を覚ました時だった。辺りを見渡すと、一人の女性がいた。絆創膏を取りに来たようだが、異質な臭い（アラガミの血の臭い。その時はまだわからなかった）が漂っていて、ところどころ煤汚れている。

「あ、気が付いた？ほんとにさ、あれだけで悲鳴を上げるなんてこつちがびっくりしちゃった。君には、もっと強いアラガミと戦ってもらう必要があるんだから、ここで倒れてちゃいけないでしょ。」

……ああ、申し遅れちゃった。私は楠リツカ。君の、ううん、君たち神機使いの神機は、私たちが整備しているから。無闇に扱ったりしたら許さないからね。とりあえず、今後ともよろしく」

「あ、……はい……」

「それじゃあ私はこれで。さっさと自分のしなきゃいけないことをしなよー」

何かを感じた。俺が、閉じ込められていた家の中では感じられなかった想いを。子供のころにみんなで遊んだ時の想いとも違う、今までに一度も味わったことのない、想いを。

……過去を振り返って、あの時の思い出に少し微笑みながら、神機を取った。

「それでは行つてきます。……神機の整備、頑張ってくださいよ」
「はいはい、分かっているよ」

彼女も微笑んで返してくれた。心が温まる。ゴッドイーターは、確かに大変な仕事だけれど、この場所を通るたび、やる気が出る。

そしてヘリへ向かおうとすると、後ろから罵声が聞こえた。

「おいおい、なんだよこれ？ あんなに綺麗にしてやったつてのによ、どういふことなんだっ！」

「あ、あれのどこが綺麗だつていうのっ?! あんな神機だと戦闘中に滑つたりして危険だから、」

どうやら楠さんが揉めているようだ。もちろんあのガキと。

「なにがどうなっているんだ？ ヨシツグ、詳しく聞かせてくれ」

「……塗装スプレーだよ」

塗装？ ……神機に塗装したつていうのか？ ……奴が言うにはワックスコーティング用ラッカーを使用したとのことだが、そんなことをしたら神機が滑つて大惨事になりかねない。それを楠さんがワックスを落としたものだからこんなことになってしまったのだ。

「とりあえず落ち着きな、ガキ。またあいつが怒るじゃないか」

「黙れ、誰のせいだ怒っているんだ」

そして、フォーゲルヴァイデの説得で、ようやくガキをなだめることができた。……去り際に彼は言い残す。

「ヘンつ、本当に使えねえな、このクソ整備士が！ やっぱり女なんて姉ちゃんに比べたらこんなものなんだよ！」

……俺は、リツカさんに謝った。

「レキさんのせいじゃ、ないよ。私が、よく考えないでこういうことをしちゃったから……」

「リツカさんは、間違ってますよ。ぐうの音が出ないまで叩き潰して分かせてやりますよ。あつ、冗談ですから、気にしないでくださいね」

「早くしろ、置いてくぞ」

フードの男が再び怒り出しそうなのでさっさと行くことにしよう。……少し振り返って、リツカさんの背中が、とても悲しそうに見える。

1251 自室

「睦月ケイスケ」

「はあ、訓練所は全部使用中、受注できるミッションも今はなし。ずるいぜ、レキ！ というかツバキさんもツバキさんだよ。あれぐらいの任務なら俺でも行けるっての！」

ベッドに寝るところがってイライラ。コウタにバガラリーの第二巻（定価：1600fc・六話から十話まで。といってもコウタは全部録画したらしいが）でも借りに行こうかな。

「の前に飯！。とりあえずこのでかいトウモロコシ！ どう調理すりゃいいんだよ？」

実はこれ、しばらく出しっぱなしにしまってカチカチに乾燥してしまっただ。まさかここまで乾燥するとは思わなかった！

ここまで乾燥するなんて知らなかった！！ 冷蔵庫に入れておけばよかった。

茹でるのか？ ああ、でもおいしくなさそうだなあ。

「おーい、ケイスケー。バガラリーの一卷だけど、」

「あ、ちょうどよかった。なあ、一つ相談があるんだが……」

1254 新人区画・廊下

「ウイル・シャムロック？」

一体オレは何をしているんだ？ 本当にくだらな。勝手に病室を抜け出して歩き回った拳句、ついには迷ってしまうとは。

「それにしても、南米支部とはだいぶ作りが違うな。まア、こついう知らないところを探索するのが面白いんだけど」

正直歩きにくい。足を負傷しているのだから仕方がないのだが。

「……ん？ なんだか香ばしい匂いがするな。ちくしょ、腹減ツてんのによ。こりゃ拷問じゃねエか」

匂いのもとのはあの部屋から。ドアが開放されている。そりゃここまで匂うわけだな。

……？ 悲鳴も聞こえてきたような。

「う、うぎゃあ、どうなってるんだこれ?!」

「おいコウタ！ わ、わ、こぼれる、こぼれるっ!!」

……気になるし腹減ったしで、オレの好奇心がくすぐられた。と
りあえず覗きに行ってみて、ついでにお相伴に与ることにしようか。

3・STRANGER（後書き）

ああ、やっちゃった。まず意味不明な奴が登場して。次にエリックが登場して、やっぱり訳の分からない奴も登場して。……嫌な予感しかないというか、地雷というか。

エリックを生かすも殺すも作者の自由！ だけど、命を弄んではいけませんっ。全て、脚本の通りに物事を進めるだけ。その流れの中で誰が死んで、誰が生きるか。言ったらネタバレになってしまうしね。

何か質問や、気になったところなどがあれば、コメントでどんどん訊いてくれて構いません。所詮自分も人の子ですし、とんでもないミスをしてかしてるかもしれないですし……。

それでは次回まで。

4・LOSE HEART

1251 自室

「睦月ケイスケ」

「ジャイアントトウモロコシかあ。……茹でるのはどうかな？」

「ほら、よく確かめてみるよ。カチカチだろ？ 茹でてもおいしくなさそうだから、どうやって調理しようか考えてたんだ」

一応お袋に調理方法のデータは渡されたが、生憎乾燥したトウモロコシの料理は書いてなかった。

「そつえばさ、かーちゃんが一度乾燥させたトウモロコシで何か作ってくれたんだ。確か、ポップコーンって言ったけど、味が思い出せなくってさ」

料理のうちのほとんどは旧世代からのものが多い。ただ、食材の一部はアラガミや環境の変化に耐え切れずに絶滅してしまった。無論、肉類は支部によって制限されているところもあるらしい。

この支部は、幸い家畜の肉などの量産が行われている。……とは言ったものの、生産量は少なく、値段は結構張る。いつも食べられるような代物ではないことは確かだ。それに対してアメリカ支部では生産が活発で、値段もかなり手頃となっている。一度でいいからビフテキをたらふく食ってみたいものだ。もっとも、俺は今の食事で十分満足しているが。

ちなみに後で調べて分かったことだが、ポップコーンは旧世代ではそれなりにポピュラーな菓子だそうだ。劇場で芝居とかを見るときに食べるものらしい。

「作り方は知ってるのか？ 材料も足りるといいが」

「えっと、足りてるよ。味付けは自由だったみたいだし」

とりあえず作ってみることにした。旧世代のトウモロコシはちゃんと破裂するものが必要だったようだが、このジャイアントトウモロコシは品種改良されているため使うことができるそうだ。さすがフエンリル、すごいなあ。

まずこの乾燥トウモロコシを芯から外す。やっぱりでかいからたくさん取れた。鍋には、ギリギリ入りきったのでセーフとする。そして、コンロに点火。

一応食事なので甘い砂糖ではなく、味の濃いバター……もとい、マーガリンを加えてみる（動物性の油脂か植物性の油脂か。もちろん、この御時勢に動物性などもつてのほかである）。マーガリンなら脂は不要だそうだ。

そして蓋をする。

「それで、あとは待つだけだよな」

コウタがうなずくと、とりあえず俺は皿を用意した。ちょっと大きめの皿だから、きつとあの量なら入るだろう。

しばらく寛いでいると、何かが弾ける音がした。二回、三回。四、五、六七、八九十、……。断続的に鳴り響く破裂音。ついにポップコーンが完成してきたようだ。バター、もといマーガリンのいい香りが部屋に香る。

「おいしそうだったのがよく分かるぜ。ああ、楽しみだな」

「……ねえ、ケイスケ。なんか、鍋の蓋が……」

カタカタと鍋の蓋が揺れる。嫌な予感がして咄嗟に身を屈めると、蓋が破裂音とともに勢いよく跳ね飛んできた。そして、それを合図に部屋中にポップコーンが飛ぶ、跳ねる。

「う、うぎゃあ、どうなってんだこれ?! って痛っ、痛い痛い!」

「おいコウタ! わ、わ、こぼれる、こぼれるっ!!」

正直こぼれていることを気にしている場合ではなかったが、もつたいたい! 床はきれいだが三秒を超越してしまっている!! どう見ても洗えば喰える代物ではなさそうである。

「というか痛い! 痛い! 熱い!! どこかに隠れる必要がある! だろうか。」

しばらくベッドの下やテーブルの下に身を隠した俺たちは、破裂音が聞こえなくなったのを確認して、部屋を見渡してみる。

……そのポップコーンとやらは、元の体積の6倍程度まで膨れ上がっていた。あな恐ろしいや品種改良。部屋中はバター、もといマーガリン臭で満たされていた。食欲がそられるどころか微妙に吐き気がする。さすが、油つてのは恐ろしいものだ!

「あーあ。……部屋、汚れちまったな。ポップコーンも喰えるかな?」

「ん? それぐらい喰えるだろ?」

部屋の入り口から聞き慣れない声が聞こえてきた。頭に包帯、足にテーピング。……あれ、この人って確か寝てるんじゃないかっただけ。なんで起きてるんだ? というか、

「日本語っ?!」

「日本語? と言われてもな……。この辺り出身の奴がこの言葉じゃベツて何が悪いんだよ?」

ウソだろ、おい。確かこの人の名前って、

「ウィラードさん、……ですよね」

「ああ、ウィラード・カーライル・シャムロック。よく知ってるな。長ツたるいからオレはミドルネームを取ッ払ッてウィラードは短くしてウィル。ウィル・シャムロックで通してる」

完全に欧風の名前である。どう考えてもこの辺り出身とは思えない。

「この辺りだツての。だいたい、そうだな……寺がある辺りだ」

「もしかして、親が海外出身ってことかな？」

「んー、まアそんなところだな」

……コウタはとりあえず納得した表情を見せる。当の本人はとうと、微笑んではいるがどこか不気味なオーラを漂わせているというか。

「とりあえず腹減ッてるんだ。喰ッていいよな、いいよな？」

一瞬尻尾振ってる生き物みたいに見えた。まあ今の彼のイメージはそんな感じだ、獣的な。本当に腹減ッてるんだな。

「それじゃ遠慮なく！」

「おい、まだいいって言って……」

1256 自室

「睦月ケイスケ」

「ぐうう、……すうう……」

……なんという食欲。俺たちが喰うのを躊躇っているうちに喰い散らかしちまった。そんでもってすぐに寝た。叩き起こそうとしても起きようとしない。……まるで最初から寝ていたみたいだ。

「すみませーん」

「はいはい、開いてますよー」

ノックと声。とりあえず中へ入るよう促すと、ドアが開いた。中に入ってきた彼女は、少し驚いた様子だった。……確か、彼女はレキに人中を殴られたときに介抱しに来てくれた人だったような。

「うわあ……、ひどく汚しちゃったみたいねえ……。一体何したのよ？」

「ポップコーン」

「ポップコーン。一房丸ごと」

「量考えてやりなさいよ！ 一房丸ごとやったんじゃこうなっても仕方ないって」

そして、熟睡中のウィラードさんを見てやっぱりびっくりする。

「どこに行ったか探してたけど、なんでここに居るのよ……。連れしてきたわけじゃないわよね？」

「腹が減ったーって言って勝手に押しかけてきて、それでポップコーン勝手に喰ったら勝手に寝た」

……。少し首を傾げる仕草を見せる。何か不可解な点でもあったのだろうか。

「寝ぼけてた、にしては度が過ぎてるわね。まああんたらが悪いんじゃないかったらいいか。……。それじゃあ、私は病室まで彼を連れて行くから。できれば手伝ってほしいな」

……。手伝って言うって同じである。断れそうもないので仕方なく俺が行くと言って、彼の左肩を持つ。重いっ！

1300 エントランス

「睦月ケイスケ」

「はあ、疲れたぜ」

「お疲れさま、まあ何も出ないけどー」

くそつ、弄ばれた感が強いぞ。

「そもそも、私はあなたの先輩であり上司だからね。しっかり言うこと聞いてよ？」

「ごもつともである。だがやはり納得いかない。しかし、仕方がないのでしょうがない。」

「ところで、まだ名前聞いてないんだけど」

「あれ？ まだ言っただけじゃなかったっけ。ごめん、忘れてたっぽい」

改めて彼女はこちらに向き直る。

「私はリリア・エヴァレット。階級は上等衛生兵曹。目標は、サクヤ上官みたくになることかな。とりあえず、私もあなたの手伝いぐらいはできるから、任務へは気軽に呼んでね」

上等衛生兵曹……？ とにかく、新兵との差は歴然だと瞬時に把握した。

「そういえばあなたを殴った人はどこにいるのかな」

「レキか？ 確か任務に出てるって。ヒバリさんに聞けば分かるかもしれないな」

というわけで、休憩中なのかコーヒーを飲んでいるヒバリさんに訊いてみた。

「えつと、ちょっと待ってくださいね。……あ、今出ているところです。メンバーは、レキさんと、ソーマさんと、……あれ。四人のはずなのに、三人しか名前が入っていないわね。入力ミスかしら？」

「ああ、レキが出ているかどうか確認できたからもういいですよ」「いいえ、この極東支部のエントランスを預かるオペレーターとして、この程度のミスはあつてはならないわ。もつと精進しなきゃ！」

……何かに燃えているようである。やる気が感じられるからどうでもいいこととする。

「とりあえず俺トイレガマンしてたから、それじゃこれで！」

「ああ、まだ頼みたいことあったのにー」

漏れたらやばいじゃねえか。そんなのは後回し！　というか他の人に頼んでっ！

自室まで戻るには、エレベーターを待つ時間があるからさすがに耐えきれない。ということは公共トイレの一択のみとなる。

「到着！　……えっと、せい、そう、ちゅう……とな」

体中から冷たい汗がぞわっと湧き出る。だああっ、いつもはもう終わってるはずなのにーッ！？　そう思ったとき、トイレから女性が出てきた。

「ごめんね、もうちょっと時間が掛かるからね。全く、あの坊ちゃんにはトイレの使い方もまともに知らないだなんて」

「あの坊ちゃん……？」

思い当たるとすれば、……やはり、『あいつ』のことだろうな。あんな奴は、さっさといなくなってしまえばいい。ヒバリさんだつて迷惑していたようだし。

で、結局待つよりは自室に行った方が早いんじゃない？　と考えた俺は、急いで自室へ帰ることにした。まあ、間に合ったからよかったものの。

……へりから降りると、あまりの湿気に気分が悪くなりそうになった。それはあのガキも同じようだが。あいつと同じというのはい

やだな。

「うう、くそつ、こんなところに来るぐらいなら別の任務に出ればよかった」

志願しておいて無責任な奴だな。お前が代わりに死ねばいいんだ。

……あれ？ 代わりって……、誰の代わりだ……？

「……それにしても、鉄塔というよりは、工場の跡地のように見受けられるが、……有害物質とかは出ていないだろうな」

「ここは工場じゃなくて発電所さ。だから有害物質なんて出ていない。分かったかい、榊？」

やはりいちいち上から目線。ちょっとイラツとくる。

「うるさい、お前は上だけ見てろ」

もっとデータベースを確認すべきだったか。情報の仕入れ方を俺はあまり知らない。うちはテレビもなかったし、新聞も経済に関すること以外は取っていなかった。そして、まともに話す相手なんて、……誰一人として、いなかった。話すのは、ただ社交的に交友関係なんてものは、遠い昔に切り捨てられてしまった。

「とりあえず、敵の位置を確認だ。えっと、まだ名前聞いてないんですけど、」

「忘れていたな。俺は……」

「危ないッ!!」

突然エリックは大声を出す。何かと思えば、彼の指先 鉄塔
の上に、オウガテイルを一体確認した。

俺は、エリックの腕を引いて、フードの男は口を開いた。

「前田、上だ!!」

前田上だという言葉の響きに違和感と可笑しさを覚えたが、それは気にしない。悪いのは前田という苗字である彼なのだ。

……しかし、一瞬彼の姿がフォーゲルヴァイデに見えたような気がした。瞬きをすると消えてしまったが、きつとそれは幻視に違いない。

オウガテイルが跳んだ。前田はにやりと笑うと、銃口を奴に向ける。

「へへんツ、こんな奴は一撃で葬ってやるよ！俺を襲ってきたのが間違いだつたな、本当に馬鹿だな、お前は！！」

彼は抗った。だけど、死神からは誰もかれも逃げられないだろう。「……ん？……弾がでねえ。……おつかしいなあ」

彼の撃とうとしていた弾は、OPを多く必要とする弾だったようだ。

だが、今回の任務での彼の装備の特性上、他のパーツと比べて神機のOPの最大値が低くなっているのだ。

……そして何より、このバレットは初めての登用であり、人生最期の登用となってしまった。

俺は反射的に彼に手を伸ばす。たとえ彼があんな奴だとしても、……見殺しにはできない。彼だって、改心はできる筈だ、今からでもやり直せる筈だ。

やり直せる？ 本当に？

そして、彼の顔がこちらを向いて、恐怖と驚愕で、顔は皺くちやに歪んで、わずかな涙が頬を伝っていた。後は引くだけだった。後は、腕を引っ張りさえすれば彼を助けることは可能だった。……だが、一つの疑念が、それを阻害する。

……その顔は、オウガテイルの牙によって削がれ、言葉にならない絶叫を上げながら、俺の体を鮮血で濡らした。返り血に俺は目をつぶりながら、ぐつと彼の腕を引っ張った。

そして、静寂の後、俺はゆっくりと目を開ける。俺は、しっかりと彼の腕をつかんでいることができたのだ。

俺の手中には、彼の腕『だけ』が、あった。

「あ、……あああああああああああ　　！」

へたつと情けなく腰が落ちる。俺は持っていたそれを放って、必死に後ずさりをする。

「ぼーッとするな！」
そして、フードの男は一抹の躊躇いもなく、彼の胴体ごとオウガテイルを引き裂いた。

彼の血とアラガミの血を体中に浴びて、俺の意識は真っ白になった。

1358 鉄塔の森

「榊レキ」

「……そろそろ落ち着いてきただろう、どうだい？」

「……フォーゲルヴァイデ、か……」

俺は、今の時間が鉄塔の森で、現在地がもうすぐ1400になる
うとしていることに気付いた。

頭の中はショートしていて、思考回路も真っ白で……。

「守れなかったんだよ、俺なんかじゃ……」

「……榊。僕は、彼に手を差し伸べることもできなかった。自分だ
けが逃げ出した。……でも、榊は助けようとしたじゃないか」

でも、結局助けられなかった。……助けなかった。俺はいつまで
も、誰も守れず、助けられずに生きていくことしかできないのだ。

「卑屈になるなら働け。……ようこそ、クソツたれの職場へ」

俺の悲しみを遮るようにフードの男は語りだす。

「……言っておくが、こんなことは日常茶飯事だ。いちいち悲しん
でいたら身がもたねえぞ」

まるで感傷に浸ることも許さぬかのごとく、淡々と語り続けるの
だ。

「あんだ、一体誰なんだ」

俺は感情を露わにして、尋ねた。……他人のことを、初めてあんな
た呼びわりのした気がする。

「名乗り忘れていたな。俺はソーマだ。……別に覚えなくていい」
ソーマという男。……俺はこいつのことが好きになれそうにない。

「……時間くつちまったな。行くぞ、ルーキー」

「待ちたまえ、榊はまだ、」
「もう大丈夫だ。……どうにもならないから、どうにかするしかない
のだからな」

俺は、俺の生き方を遂行するしかない。俺には他人の生き方を決
める権利もなければ、義務もないのだから。

「俺は行く。立ち止まっても埒が明かないことは自分でもわかって

いるからな」

神機を構えて、用意ができたことをここに証明する。

「……どうした？ 何ぼさっと突っ立ってんだ、フォーゲルバイデ？」

震える心を抑えつつも、いつも通りの淡白な俺を演じよう。

「く、だから君はまともな発音もできないのかい?!」

俺たちを無視して、ソーマは行こうとする。どう討伐するのか俺たちはまだ聞いていない。

「オウガテイルの方は俺が誘導する。コクーンメイデンの方は煮るなり焼くなりしてやれ」

そう言っただけは、挑発フェロモンを服用する。オウガテイルが彼の後を追っていくのが見えた。彼の手で殺されてしまっても知らずに。

「ターゲットは二体。一人一体でいいね？ ……そうだ、榊………久しぶりに、アレをやらないか？」

「……剣形態も使用できる俺が有利じゃねえか」

「ならば銃形態しか使っただけじゃない、それでいいだろう？」

……お互いに笑い、照準を目の前の繭の処女達にあわせる。ただ、これまでの缶だったのが、アラガミに変わっただけだ。……そして、どちらともなく声がかかって、撃ち合いが始まった。

……どちらが先に倒せるか。無論、ブラストのほうが有利に決まっているが、新型をなめてもらっては困るな。時折飛んでくるレーザーを避けながら、撃つ、撃つ、撃つ。

二つの弾丸が交じり合い、描く軌跡はまさに虚空に蝶が舞うかのごとく……危ない危ない、これがフォーゲルバイデの特殊能力、『華麗結界』というものか（そんなものはない）。

……それが、俺に対しての励ましだっただけは、よく分かっている。

たさ。だから、その好意を無駄にするわけにはいかない。

「っと、弾切れか。Oアンブルを服用だな」

「……あぁッ、アイテムがっ!？」

「おいおい、切らしてたのかよ。」

「ほらよっ、あとで倍にして返せ」

一応フェアに戦いたいから、おれはOアンブルを寄越した。

「……そろそろっ、くたばるんじゃないかい？」

「あぁ、じゃあどちらが先に仕留められるかはっ、次の一発ってところか」

だから、最後の一発は間髪入れずにぶち込んでやった。ただ、彼も同じことを考えていたようだ。

「華麗なる、エリックシュート!!」

でた、フォーゲルヴァイデの必殺技。何気に格好つけるなよ。気に入くわないな。

「……目標は、二体とも沈黙か。どっちが先にやったかよく分からなかったが……」

「この勝負は持ち越しとしよう。もちろん、次は僕が勝つから、覚悟したまえよ?」

……そして、ソーマが戻ってきた。あちらも終わったようだ。彼がへりを呼んで、俺たちは少しの間待機していた。

「なあ、フォーゲルヴァイデ」

「……ヨシツグのことかい」

それ以上話すことはないだろう、と空笑いを浮かべる。

あの対決だって、フォーゲルヴァイデが俺に忘れさせてあげたいがためにしたことだから。でも、あんなことで俺の気が晴れるわけがなかった。

「なんであのガキ、死んじまったんだらうな」

決まっている、あいつの不注意であり、自分の力量を把握していなかったためだ。

「……僕にも、責任はあるのかもしれないね。彼を急かしてしまった、彼を、……本当に、睦月君が言うように、うわべだけでもいいから弟子にしておけばよかったのかもしれないよ」

アナグラへ帰って、どんな顔をしていればいいか、分からない。……そもそも、今の自分がどんな顔をしているのか、分からない。きつと絶望と恐怖で一生しわくちやだろ。

……いつか読んだ本のような、そんな感覚があった。

1546 エントランス

「睦月ケイスケ」

アナグラ内に、変化はなかった。……そう、何も、変化はなかったのだ。

……違う、責めなかったわけでも元気づけようとしたわけでもないんだ。

何も、なかった。そう、誰も死んではいなかった。彼らは『三人』でミッションへ行った。

そう、彼の存在を抹消した。ただ、それだけである。不穏分子を排除してくれた彼を、心中では賞賛している者もいるに違いない。ただ、こういった場では誰もそういうことを言わないだけであって。

「なあコウタ。……あいつの行いが悪かったから、こうなったのか」「うん。誰か一人でも、涙を流してくれる人がいる筈なのに……誰

もないなんて、悲しすぎるよ」

この出来事は、俺たちの心を確かに抉っていった。尤も、一番辛いのは……いくら性格が悪かったとはいえ、『彼』の命が奪われる瞬間を、目の前で見てしまったレキに違いない。

1600 自室

「榊レキ」

ベッドに俯せになって、忘れようとしたけども、目の前の鮮血がどうやっても落ちなかった。

あいつの苦しむ顔、悲鳴。脳裏に焦げ付いて、消し去ろうとしても落ちようとしないのだ。このままでは、完全に気が狂れてしまいそう、俺は誰かに助けを求めようとした。……だけど、すぐに冷静になって……そんな自分が情けなくなった。

「助けてくれる奴なんて、誰もいないはずなのにな……」

自嘲して、俺は寝返りを打つ。とその時、軽い金属音が二回。

「……ん。ノックか」

……ドアのロックを外すと、サクヤさんがいた。

「しばらくお邪魔して、いいかしら」

「あ、……はい。構いませんよ」

……彼女は部屋を見渡して、その書籍の量に戸惑いを隠しきれないようだ。

「……こんなにあるなんて、すごいわね。一体どうしたの？」

現在は、ここにある書籍のほとんどがデータ化されていて、これらの物は旧世代の遺産とされている。だから、ここまで書籍がある

というのはすごいことなだろう。

父はこのようなものを集めるのが好きだった。俺も、本を読むことは、機械を見るよりも楽しかった。よく、小さい頃は母親に本を読んでもらったっけ。……思い出そうとすると、とても悲しくて、胸が張り裂けてしまいそう。

もし、また母親に会えるのなら。母が待つ家に、帰ることができるのなら。……すべてを捨てても、帰りたい。

……だけど、

「家から持ってきたものです。……もう、あの家には戻れませんから」

……俺の言葉から事情を察するには、あまりにも情報不足。だけど、何かを察したのかサクヤさんはその話を切り上げてくれた。

「それで、……大丈夫かしら」

「大丈夫って、……何がですか」

わざと素っ気ない態度を取った。もちろん、何を意図したことは十二分に想像がついている。

「ソーマから聞いたわ。……初めて見るから辛いことは分かっている、でも、」

「違う。……俺は、辛いわけではありませんから。もういいです、……心配してくれて、ありがとうございました。……もう、用事は済みましたよね」

俺は、一人でいたかった。一人でいた方がよかった。……部屋に閉じこもっていた方が、よかった。誰かに、この罪悪感を知られたくない。覺られたくない。

だけど、彼女は部屋から出ようとしなかった。……だから、仕方なく追い出すのをやめる。

「……それとも、助けられなかったから、かしら。……あなたのこと

とだから、そつちだつてことは分かつてたわ」

「一応確認、つてところですか。俺はあいつを守つてあげられなかった。それが悔しいのは、確かです。……もちろん、こんなくらない問題に正解しても、何もあげられないですけど」

そんな冗談を言つたけど、彼女は少しも笑つてくれなかった。それどころか、くだらなくなんかない、と俺の言葉を一蹴した。……違つのに。助け『られ』なかったからじゃないのに。

「……どうしました？ ……仲間一人守れない俺は、必要ないつてことですか」

「そんなことないわ！ どうしてそんなこと言つのよ？」

ひしひしと湧き上がる得体のしれない苛立ち、感情。理性はそれを堰き止めることができなかった。

「……だつたら、なんでそう言い切れるんだよ。僕は誰の期待にも応えられない。それどころか大切な人の一人も守ることができない！ そんな僕が、なんで必要だつていうんだよ?!」

「仲間だからよっ!! 第一部隊のメンバーとして、極東支部のメンバーとして、……同じゴッドイーターとしてっ!!」

そう、僕は、僕らはゴッドイーター。いつ仲間がいなくなつてもおかしくない、死と隣り合わせの職業。そんな仕事を、僕らはしているんだ。……なんで、こんなことをしているんだらう。

……分からない。自分のことが、分からない……。

「一人守れなかつたら二人守りなさい、二人助けられなかつたら四人助けてあげなさい、もし百人が苦しむ顔を見せるようなら、二百人を笑顔にしてあげて!! そのためには、……あなたが必要だからっ!!」

その言葉を聞いたとき、再び僕は必要とされていることに気付けた。そして、理解したんだ。……なんで、ゴッドイーターになろうと思ったのか。

ただ、自分の存在する意味がほしかっただけなんだ。

ただ、自分を必要としてくれる存在がほしかっただけなんだ。

ただ、……自分の存在を認めてくれる居場所がほしかった、だけなんだ。

「へへ、かつこ悪いですね、俺。女性にここまで言われるなんて、初めてですよ。……母親にも、……こんな感じで怒られたこと、一度もないんですから。だから、なんで涙が出るか、……全然ッ、……分からないんです」

壁に額を押し付けて、できるだけサクヤさんに涙が見えないようにするけど、……嗚咽までを抑えることは、俺には到底不可能なことだった。

サクヤさんは、俺の心に這う鳶を払ってくれた。でも、その根を取り払うにはまだ至らない。それでも、俺は嬉しかった。彼女のおかげで、まだ俺はここに居られると思えたから。

……そのあとどうしたかは、正直覚えていない。だけど、彼女は俺の手をしっかりと握っていてくれた。

……その手は、生きている人の手だった。

「睦月ケイスケ」

入隊して2週間が過ぎた。そんな時、俺とコウタはツバキさんに呼び出された。

「へ、……っ、ツバキさん、冗談ですよー」

「冗談を言えるほど気が利かないものでな。とにかく、次のミッシヨンは睦月と藤木の二人だけで行ってもらう」

心配だなーと思う一方、コウタは目を輝かせている。確かに、次のミッシヨンの場所は俺たちが初めて行く場所だからな。

「そして戦う相手も初めてだな。おそらく、これまでのアラガミと違って苦労するだろう」

「えっと、確かコンゴウだったっけ。データベースで調べたけど、」

……コンゴウはこれまで見てきたオウガテイル、コクーンメイデン、見たことはないが聞いたことはあるザイゴートといった、小型アラガミと違う。

主に体力、攻撃力、耐久力も（小型アラガミと比べると、だが）極端に上がり、多彩な技を仕掛けてくるそうだ。たしか、背中のパイプから風を使った攻撃をしてくる、らしい。

「その分報酬も高めになってる！ これを逃す手はないな」

「そうか、ならば今からでも行ってもらおうか。弱点に合った武器と、相手の攻撃を軽減できる装備をするように」

……鼓動が早くなっている。そんな時、コウタが少しうらやましい。俺もこれぐらいマイペースでいられたらなあ。

「睦月ケイスケ」

「うわぁ、寒いね」

「滑るから気をつけるよ」

辺りが凍っていて、危なっかしかったらありやしない。スパイクに履き替えて来ればよかったかな。

ふと、空を見上げると少し欠けた月と、極光のカーテン。

オーロラを直に見たのは初めてだ。

「おっとっと、こんな所で油売ってる場合じゃないか。とにかくコングウとやらを見つけようぜ」

俺は神機を銃形態に変形させる。奴によく効きそうな取って置き
のバレットを作っておいたんだ？

「……あれ？ なあ、ケイスケ。今何か声が聞こえなかった？」

「声？ 気のせいじゃないか、俺はそんなの聞いて、」

どしゃつと、上から何か落ちてきた。びっくりして咄嗟に後退すると、……どうやら建物に積もっていた雪が落ちたようだった。

「な、なんだ。びっくりしたなあ」

コウタが笑ってこちらを向いて。……その背後に何か降り立っ
た。

「コウタ、そこどけいっ！」

俺は二、三発バレットを撃って、……相手の姿を確認した。禍々
しく、だけどどこか神々しさすら感じる姿。

「な、なんでここが分かったんだ?!」

「ああ、……そりゃたぶん、俺のせいだな……」

データベースの受け売りだが、奴は聴覚に優れているから、どんな些細な音でもすぐに気付いて向かってくるそうだ。恐らく、俺が神機を變形させたときの音だ。騒音スキルがついていたのが一番の原因か。くっ、油断した。

「とりあえずよ、こいつがコンゴウだな」

戦慄する俺たち。そして猿神は、高貴で粗暴な咆哮を上げた。

俺たちは神機を構えて、各々攻撃を開始する。

1821 鎮魂の廃寺

「藤木コウタ」

「あ、ああ……ケイスケ……どうしよう」

建物の陰から確認しているが、ケイスケが力尽きて倒れてしまっているのが見える。急いでリンクエイドしなければ、きっと間に合わなくなってしまう。

「だけど、その周辺で徘徊するコンゴウのせいで近寄ることができない。」

「俺がコンゴウの攻撃に気付かなかったせいで……」

コンゴウは、風を主体とした攻撃を使用する。俺は遠くから援護射撃を行い、時々飛んでくる空気を固めたような弾を回避していた。……だが、再びコンゴウが弾を撃ってきたようだったが、不発のように見えた。

すると、血相を変えてケイスケは俺を突き飛ばして、足元からの真空による竜巻をもろに喰らった。

天高く打ち上げられるケイスケ。……地面にたたきつけられる。それを見た俺は、怖くなってそのまま逃げだしてしまった。

……俺が気づいていれば、こんなことにはならなかったんだ。

だから、覚悟を決めて近付こうと思った。……だけど、不意にノゾミとかーちゃんの顔が頭をよぎって、恐ろしい『もしも』が心中に渦巻く。

このまま逃げださないか、とそんな『もしも』を想像する自分が語りかけてくる。

「確かに俺が、かーちゃんとノゾミを守ってあげなきゃならない……。だけど、目の前の仲間を、放っておけない」

……コンゴウが去ったことを確認して、物陰から飛び出してリンクエイドを施した。

「よし、できた。ふう……リンクエイドは体力を結構使うんだな」

……とその時、突然二体のオウガテイルが襲いかかってきた。一瞬驚いたが、落ち着いて一体に麻痺弾をぶち込んで動きを止めさせた。

そしてもう一体に照準を合わせて引き金を引く。

「ッ！ 弾切れかつ！？」

体力は本当に残っていないといえるレベル。回避ももう間に合いそうにない。まさに万事休すというやつだろうか。俺が死を覚悟した時だった。

さつとケイスケが立ち上がり、一発、二発と撃つ。一発目は思いっきり外れたが、二発目はオウガテイルに命中し、ひるませることができた。

「ごめん、俺のせいで」

「ほら、早く回復しないとコウタも危ないんじゃないか？」

ケイスケは神機を剣形態に切り替えて、二体のオウガテイルを一刀両断する。その攻撃で奴らは力尽きたようだ。

俺はその間に回復錠と、Oアンプルを使用した。

「と、親玉も嗅ぎ付けてきたか」

案の定音を聞きつけてコンゴウが来たようだった。そして、こちら目掛けて弾を撃とうとするが、不発のように見える。

「同じ攻撃にはもう騙されないぞ！」

俺は横に避けると、空気がその場で爆発する。さて、こっちもどんどん弾を撃つていこう！

「攻撃パターンが読めてくると案外楽だな！ おおっと、」

ケイスケがコンゴウのパンチを咄嗟に回避し、剣を振り下ろした。すると突然、コンゴウの顔面が割れて、頭を抱え込むように倒れる。「これが結合崩壊ってヤツか……。だけど今が攻撃するチャンスだな」

ケイスケは捕喰し、バースト状態になった後にチャージクラッシュを胴体に叩き込む。すると、こちらも砕けた。

「よし、一気に倒してやる！」

「待った、……。何か様子がおかしいぞ」

ゆっくりと起き上がると、急にいきり立って吼えた。息も荒い。

……。少し嫌な予感がする。

「ケイスケ、しばらく様子を、」

「っ、コウタ、下がれ！」

その場でコンゴウが縮こまると、突然コンゴウの背部パイプから真空波が周囲に放たれた。俺はケイスケの言うとおりで下がったから無事だった。当の彼は、辛うじてガードはしたものの、頬の下が少し切れているのが見える。

「これが、活性化って奴だな。さっさと倒したほうがよさそうだ。
んじゃあ、コウタ。お前に託すぜ、俺の弾」

そう言っていると、彼はアラガミ弾を三発こちらへ受け渡す。リンクバ
ースト・レベル3。それによって、俺の力は極限まで高まっていく。
「……任せとけてえっ!!」

昂る意識と裏腹に、視界がスローモーションな感覚を味わう。違
う、周りが遅いんじゃない、俺の心が急いでるんだ。奴の激しい攻
撃も、遅い世界の中では容易に避けられた。

そして俺は、コンゴウの正面に立つ。後はただ、『モウスイブロ
ウ』の銃口を顔面に押し付けて、

「これでどうだあああぁっ?!!!」

引き金を引いて、濃縮エアスラッグ・レベル3はその場で炸裂す
る。その衝撃に耐えられず、俺の体は吹き飛ばされた。

頭を地面に強く打ち付けて、少し顔をしかめる。雪が積もってい
たからあまり痛くはなかったものの、やっぱり少し硬い。

そしてケイスケが俺のもとへ駆け寄り、起こすのを手伝ってくれ
た。

「うう、いてえ。……そうだ、ケイスケ。コンゴウは？」

自分の目で確かめろ、と言わんばかりに親指でくいつくいつと向
きを示す。俺はとりあえず倒れているコンゴウを見て、……深くた
め息をついた。

「俺たち二人でも倒せるんだ、こんな強い奴でも!」

「なんだよ、今更気づいたのか？俺は最初っから気づいてたぜ、
そんなことはよ」

そう言いながら力尽きたコンゴウを捕喰し、コアを回収するケイ
スケだった。

4・LOSE HEART（後書き）

退場者は早々に。一応弁解はしておくが、あの人を生かしたいがために彼を出したわけではない。それに、彼がいつ死ぬかは、自分も知らない。

1話で出てきた衛生兵さんにもやっと名前が付きました。彼女は旧型だけど、それなりにストーリーとの関わりはあると思う。さすがに前面に押し出す気はないけれど。

そしてついに次回彼女の出番！ やったね！ ちなみにまた新型が追加されてまう。「またオリキャラかよ……」なんて思わないでよね、バーゲンって書いてるほどなんだから諦めてね！ ……とは言ったものの、その、……ごめんなさい。

それでも、筋だけは通す。矛盾だけは避けたいね、いつの間にかキャラの口調が変わってたりしてそうで怖い。それが自分のクオリティ。

それでは次回まで。

5・REINFORCEMENT

2342 ラボラトリ廊下

「睦月ケイスケ」

コウタと二人で初めてコンゴウを倒した晩、どうにも興奮して寝付けなかったから、その辺をふらふらと歩き回っていた。すると、神妙な面持ちで研究室に入っていく宣伝部長を見つける。

激しい好奇心に駆られ、ドアに耳でもあてて中の様子を確認することにした。普段の博士と部長のやり取りについて知りたいと思うし。実は意外と仲が良かったりするんじゃないか、と。

「……んー、何とか聞き取れそうだな」

2342 研究室内 (Sound Only)

「睦月ケイスケ (聴覚情報のみ)」

『ペイラー。……重要な話があるということは話したが、』

『こっちも重要な話はあるさ。ほら、これだ』

(コトンと、何かを机に置く音。軽い水音も聞こえる。薬品か何かだろうか?)

『これをどうしろと言っただ?』

『飲んでみてくれ。そして感想が聞きたいね』

『……そちらの重要な話は1つか。私は2つだ、私が先だな』
『飲んで、感想を言う。こっちも2つだよ』

(わずかな沈黙。ああ、いがみ合ってるっぽいね。この2人、思ったより仲が良くないのかもしれない)

『……何かの薬なのか』

(お、宣伝部長が引いた。博士のほうがもしかして偉い?)

『ジュースだよ、まだ名前はないけどね』

(ジュースか。まあ、サカキ博士が薬つてもあんまり似合っていない気がしたけど)

『はつきり言わせてもらうが、色と臭いからして飲む気にはなれないな。材料はなんだ?』

『それは企業秘密さ、強いて言うなら何かの感情かな』

(飲み物を飲む音、おそらく宣伝部長が覚悟を決めて飲んだに違いない)

(続いてグラスが割れる音。あまりの味に落としちゃったのかな)

(そして大人の男性が倒れる音。 宣伝部長……!! お

い、博士……毒殺したのか?!)

(5分あまりの沈黙。なんか不気味。というかやつぱり殺したんじゃない?)

(ようやく大人の男性 宣伝部長が立ち上がる音が聞こえる。

なんだ、生きてたのか)

『こ、……これは劇薬だ。……あまりにも、危険すぎる』

『まだ改良の余地はあると見たね。ところでヨハン、君の用事はなんだい?』

『……なぜ、彼をここへ呼んだ？』
（彼？……誰かを呼んだ？　もしかして、ウィラードさんのことだろうか？）

『君が一人呼んだから、僕も一人呼んだ。それでいいじゃないか』
（まあ、たぶんそれが妥当だと思うけど。宣伝部長は納得してないみたいだな）

『ペイラー、君が何を考えているかはわからないが、……君はスターゲイザーだろう？　何もする気はないのにもかかわらず、勝手なことをされても困るな』
（スターゲイザー？　超能力者かな？　まさか、その力で世界征服を目指して……バカバカしい）

『そもそも、彼がここ極東支部へ来ることは事前に決まっていたじゃないか。彼もこちらへ来ることを大いに望んでいたんだ、君の勝手な都合でキャンセルするのは酷だろう』

『こちらにも事情というものがある。そちらを優先するのは、このフェンリル極東支部の支部長を務める、私の権利であり、義務でもある』

『それに君が、伝え損ねたって雨宮くんに伝えただろう、君が認めたってことじゃないか』

『それは混乱を避けるためだ。認めたわけじゃない。それよりも、（こんな感じの話が延々と続く。いい加減にしてくれよ、ホントに）

『この話はいったん止めよう。このままだと水掛け論になってしまうよ』

『そうだな。少し時間も遅い、仕事に障っては困る。……だが、いつか時間が取れたら、詳しく話し合おうじゃないか』

（まだ支部長はあきらめていないみたい。ちよっとしつこいかも）

(結局、彼 ウィラードさんと呼んだ理由は分からなかった。
そして話題は変わる)

『それで、もう一つの重要な話つてのはなんだい?』

『簡単な質問がしたかっただけだ。好きな色・・・いや、ブルーとピンク、どちらがお好きかな』

『そうだねえ……。ピンクのほうが気に入ってるよ。ジュースのラベルにしてもいいかもしれないね。 ああ、そういえば、

もうすぐだったね。今年で、何年になるのだったかな』

(もうすぐ? でも、ブルーとピンクってなんだろう。花かな?
花つてことは、もしま)

『その話は、よしてくれ。……とにかく、用事は済んだ。 さ
て、入口のネズミは、どうしておくかな』

(ドアが開いた)

2349 ラボラトリ廊下

「睦月ケイスケ」

「聞き耳を立てるとは、感心できないな」

「あ、いや、……そ、そういうつもりじゃあ」

「ペイラー、彼にも例のジュースを振る舞ってやってくれ」
そう言って宣伝部長はその場を去る。

「さあ、睦月くん、君に頼みたいことがあるんだ。ちょっと来てく

れるかな」

「いや、ご遠慮しときますよ、別に嫌な予感がすると言つか、嫌な予感しかしないというか……」

兎にも角にも俺は研究室の中へ連れて行かれて、得体のしれない液体を無理やり飲まされることとなった。

えも言われぬ味に、意識が飛んだのは言うまでもない。

1108 カノンの部屋

「榊レキ」

台場さんが、自分の部屋へ招いてくれた。どうやら挨拶をしたかったようだ。

「第二部隊は主に私たちが活動してるんです。私と、タツミ君と、ブレンダンさん」

「お前もこの間入ったっていう新入りか？ 何度か会ったがなかなか挨拶できなかったからな、引きずっちゃって悪かったな」

正直気付かなかったとは言えない。ああ、おそらく口が裂けてもな。

「レキさんたちも、ここへ入隊してもうすぐ一ヶ月ですよ。もうここには慣れましたか？」

「あ、ええ。仲のいい奴もいますし」

「だからといって、油断するのは得策ではないな」

「おいおいブレンダン、あんまりプレッシャーかけないでやれよ、今は任務中じゃないんだからなあ」

仲のいい奴といって、真っ先に思い浮かんだのはフォーゲルヴァ

イデ。なんだかんだ言っ、あいつがいなかったら俺の心はとつくと折れてたからな。

そして、ケイスケに、コウタ。あいつらとの任務は、結構楽しいと思っっている。任務を楽しいと思えるのは、いささか不謹慎だが、な。

雨宮上官に、サクヤ上官。雨宮上官はいろいろなことを教えてくれるから、とても感謝している。サクヤ上官は……心から、本当に感謝している。

お湯が沸いたのを確認したのか、台場さんが台所まで行った。コーヒーのいい香りがこちらまで漂ってくる。

「そっいえば台場さんは、料理とか得意なんですか？ 自分はどうも苦手なんで」

これだから温室育ちのお坊ちゃまは。俺の馬鹿、馬鹿馬鹿っ。

「うーん……正直、ちょっと自信はないんですけどよ。あ、でも今日はクッキーを焼いたんです。おいしいと思えますよ？」

そう言っ、コーヒーと一緒におしゃれな皿に入っ、クッキーを持っってくる。

正直、クッキーと言っ、いいかは微妙な出来栄であっ。見た目ははつきり言っ、オセンベイ（もち米を薄く延ばして焼いたもの、らしい。写真では何度か見たが、実物を見たことも食べたこともない）だが、味のほうはどうだろうか？

「台場カノン特製、『ポマークッキー』です！ さあさ、どんどん食べてください。……あ、なくなってもまだありますから安心してくださいね？」

「と、とりあえず大森さんから、どうぞ」

「あ、ああ。分かった」

先輩の貫録を何とか保ち、大森さんはそれを口にし、……一瞬変

な顔をした。なんと形容したらいいか、
固い？ 固かったのか？

「あ、……でも、おいしいな、意外と」
「い、意外とって！ ひどいですよー！」

そして、つぎにバーデルさんが口にした。こちらの表情は揺るぎない。そして、それを租借し終え、一言つぶやいた。

「おいしいじゃないか、意外だ」

「ふ、二人に食べさせたのが間違いでした！ もうあげませんから！！
あ、レキさん……、すみません。あとで容器に入れて全部あげますから」

初めて二人に殺気を覚えた。今度一緒に任務に出たら誤射しまくるろう。

「それで、今日からまた新入りが入るらしいんですよ」

「また新入りか。それで、どんな奴なんだろう。できれば落ち着いた人であってほしいな」

つまり、俺たちの後輩ってわけか。何かちょっとドキドキしてきた。先輩らしいところ見せられるかどうか、というのがその心境の大半を占めている。

「ヒバリちゃんから聞いたけどさ、なんでも3人、そんでもって全員新型らしいぜ」

「ま、まだ続くんですか、新型ラッシュ？！」

極東支部は他の支部と違い、なかなか新型神機使いに恵まれない傾向があった。どうやらこの辺りの人種の体質と関係しているらしいが。

実は俺はこの支部2番目の新型神機使いらしい。ちなみに1番はケイスケだ。俺がもう数時間早ければ、とは思っていない。……思っていないはず。

そして3人ときたか。俺たち合わせて5人。他の支部に比べるとまだまだ少ないのだが。

「なんでも支部長が直々に、一人ロシア支部から引き抜いたらしいぜ。あちらさんは新型が多いって聞いたからな。あと、居住地区内から一人」

「一人足りませんね」

「忘れないであげてくださいよ、南米地区からも一人来てます、…でも、今はまだぐっすり眠っているみたいですけど」

あのウィラード・カーライル・なんとかという奴もか。しかし、起きているところを見た覚えがない。何度か起きてきているとかそういう噂はよく聞くのだが。

「その辺はどうなるんだろうな？ ……ん、おいカノン、客が来たみたいだぞ」

「あ、はい」

と、ドアを開けに行つて、足を思いつきり滑らせた。

「わっ、きゃああああああ」

そして運悪くドアが開いて、客を下敷きにしてしまつ台場さん。

「む、むぎゅっ」

「ううう……、いたたたっ」

「だ、台場さんっ、早く起きてあげてください！ 下の入室してしまいますー！！」

そして我に還つた彼女はさっと起き上がる。

「わ、ごめんなさいっ！」

「ひ、ひどいですね……。また寝ちゃうんじゃないかって思ったじゃないですか。……おっと、これはこれは改めましてこんにちは、夜でしたらこんばんは。つかぬ事を伺いますが、いま何時でしょうか？」

……どうやら例の彼は、ようやく起きたようだった。とりあえず俺たちは、彼をあいさつ回りよりも支部長室へ連れて行かせた。

1148 エントランス

「睦月ケイスケ」

任務をドタキャンしてデートとやらへ行ったリンドウさんに少々突っかった。

だけどリンドウさんは大人の対応しかないものだから、なんとかゼリーに釘を刺したような手応えのなさ。

「ほんとずるいですよ、リンドウさんに俺の活躍っぷりを見せてあげたかったし」

「……お前、そんなに活躍してたか？」

痛いところを突かれて言葉に困るコウタを見て俺とサクヤさんは笑った。

死神と噂されるソーマという男。……悪い奴には見えないんだが、あまり集団行動を好まないようだ。一匹狼ってやつかな。よく分からないけど。

「それで、デートに行ってたらしいですけど、どんな彼女ですか？

せっかくですから、俺にも相談してくださいよ」

「そうか、……まあ、お前の手には負えないと思うがな」

まだ食いつくかコウタ。いい加減その話題から離れる。

突然支部内に発せられる一斉連絡、……俺たちには関係なさそうだが、リツカさんが少々焦っていたのが見て取れた。

「なんだっただ、今の。……うるなんとかがどうとか。なあ、コウタは知ってるか？」

「あ、うん。とってもでかい奴でさ、なんというか印籠みたいな、」

「なるほどな、さっぱり分からないぜ。サクヤさん、あとは任せます」

ウロヴオロス。

巨大な体躯と、絶大な体力、攻撃力と耐久

力、どれに關しても他の多くのアラガミを超越している。詳しくはデータベースを参照、らしいが、聞く限り今の俺たちではまともに戦えはしないだろうな。

「だけど、そういわれると挑戦したくなるんだよな。まあ、もっと強くなったら、の話だけど」

「本当に、倒せる時が来るといいな。よし、強くなりたいならもつとおごるがいいさ」

「リンドウ、あなた大人でしょう？ 子供からたからないの」

俺はふと時計を見る。……もうすぐ正午を回る。そう、もうすぐだ。

「今日からお前らの後輩が入ってくるということだ。しっかりしろよ？」

「先輩って言うてもほぼ1ヶ月の差じゃないの。それに、3人のうちの2人は他の支部からの異動だからあまり気にしないで。いつも通り構えていればいいわよ、あなたたちなら」

気付けば続々とエントランスへ集まってくる他の神機使い。俺たちが既にいい位置を取っていることを妬んでそうな奴らが垣間見える。「横、入るぞ」

俺の左へ少し強引に入る奴。……レキだ。どこで油売ってたんだろうな。ちよっとコーヒー臭い。

「ああ、ちょっとそこ入るねー」

ずいっと隙間から俺の右側へ無理やり入ってくる奴一人。

「なんだ、リリアか」

「新しく入ってくる人って、どんな人なんだろうね」

「少なくとも、俺よりは技量が上だと思っぜ」

そして時間。エレベーターから出てくるツバキさんと、新入り3名。

「本日よりここフェンリル極東支部に配属される新人を紹介する。

まず、アリサ・イリーニチナ・アミエーラ」

ツバキさんがそういうと、一人の少女が前へ出て、頭を下げる。

「初めまして、アリサ・イリーニチナ・アミエーラです。本日1200付でフェンリル極東支部へと異動となりました。どうぞ、お見知りおきを」

それにしても、スタイルはかなりよさそうだ。見た感じ同年代なのに。コウタは女の子ならいつでも大歓迎だと言いつつ始末。だけど、俺はあんまりこういう機械的な奴は好きじゃないな。

「……よくも、そんな上付いた考えでここまで生きてこられましたね」

ほれみる、そおらみる。俺の思ったとおりだろ。向こうも脈ありには到底見えない。ざまあみる、コウタ。　　っと、悪乗りしてきた。

「次、ワイラード・カーライル・シャムロック」

「えっと。どうも初めまして、ワイラード・カーライル・シャムロックです。……長いから以下同文でいいですよ。名前も長いので、ウィルで結構です。とりあえずよろしく願いますね」

レキほど堅苦しくもない、丁寧な口調（だけど、一人称は俺じゃ

なかったっけ？)。それでいて、俺よりは整ってる顔（ちょっとだけだ、絶対ちよっとだけだからな！）に、爽やかな感じが万人受けしそうだ。

「とりあえず、よろしく」

俺はウィリードさんに握手を求める。さっきの女には拒否されたが、彼は快く受けてくれた。

「どうも、『初めまして』こんにちは」

「えっ？」

「えっ？」

わずかな疑問を覚えたが、何でもないと言ってその場をどうにか取り繕った。……『初めまして』じゃ、ないはずなんだが。

「最後、橋越ルカ」

「ルカです。橋越ルカ、以下同文、どうぞよろしくお願いします！」
大声。活発な感じだが、なんだか地味に擦れた感じがする。見た目は、俺たちよりかなり年上な感じ。ソーマと同じくらいの年齢かな。やっぱりコウタは喜んでるようだが。

「それじゃあ俺からよろしくっ」

勇敢にもまず一番にコウタが握手しに行った。……一瞬彼女の顔が強張ったように思える。もしかして受け付けなかったのか？

あ、でもちゃんと握手してる。一体何がどうした。

紹介が終わって、だいたいの人が帰っていった。んー、野次馬が多かったらありゃしない。

「橋越はメディカルチェックを行う。時間は分かっているな？」

「はい、分かっています」

「……あと、シャムロック。榊博士が呼んでいる。すぐ来てくれ、とのことだ」

「え？ はい、分かりました」

そして、ツバキさんはエントランスを離れた。

「シャムロックさん、早く行った方がいいんじゃないですか？ 時間がかかると橋越さんが迷惑なので」

「それじゃあそうさせてもらいます。時間がかかったら、すみません。……ところで、研究室はどこでしょうか？ あまりこの支部の構造に詳しくないので」

俺たちが案内に名乗り出たが、結局（なぜか）ソーマと一緒に行くことになった。

「なんで俺が……」

「当たり前よ、あなた先輩なんだから」

そう言つてサクヤさんは軽くソーマの背中を叩く。彼の頭の血管が少し切れそうになっているように感じたのは言うまでもない。あの人沸点低いから、途中で切捨御免みたいなことになっていなければいいけどな。

1207 研究室

「ウィル・シャムロック」

「わあ、ここがサカキ博士の研究室ですか。やっぱり極東支部は進んでいますね」

「あ、来たようだね。君は予想通りの時間に来てくれると思ったよ。彼を送ってくれたこと、感謝しているよ」

むう、やっぱり舌打ちする。この人はそういう性格なのかな。…

…だけど、少し前の『彼』に似てる。

「とりあえずありがとうございました、えっと、……お名前はなんですか？」

「ソーマだつ。くそつ、お前といると調子が狂う」

これは独特のツンデレモードというヤツかな？ そんなわけないか。あれ、出て行っちゃった。

「ところで、話ってなんですか？」

「個人的に神機使いがそれぞれどんなパラメータであるかを調べただけさ。ちよつと調べるだけで終わるよ」

「個人的つてところがブラックで、素敵ですね。それに話じゃありませんし」

眼鏡がきらりと輝く。まるで悪の科学者みたいでかつこい。直接会ったのは初めてだけど、自分の思ったような人とあまり変わらなかった。

「ところで、博士。その節はどうもありがとうございます」

「いきなり感謝だなんて、どうしたんだい？」

「……ボクは博士がいなかったら、きつと生きていられなかったでしょうから」

分かってくれないようなそぶりをわざと見せるものだから、ボクはポケットから『それ』を出してみせた。……『それ』を見てにやりと博士は笑う。だからボクもにやりと笑い返してやった。

「そういえばアミエーラさんに早くしろって言われてました。橋越さんのために急いでくださいね」

というわけでベッドへ行く。寝ていればよかつたんだっけ？

「じゃありラックスして、しばらくは寝ないでいてほしいね」

「すみません、それはできないかもしれません」

残念ながら盛大に二度寝を開始する。寝ることほど気持ちのいいことはないからね。おやすみなさい。

1502 第二訓練所

「橋越ルカ」

訓練所。うわー、広い。雨宮上官がいなかったら詳しく調べられたのになー。

「わたしとアミエーラさんだけですか。シヤムロックさんは訓練しないんですね」

「彼は3年間南米支部で活動していたらしいからな。アミエーラは確か……」

彼女は、しばらく任務に出ることがなかった。だから仕方なくこの訓練を受けているそうだが、彼女は最初必要ないと言ったようだ。

「じゃあアミエーラさん、よろしく頼みますね」

「もう少し大声で返事をすると思っただら……。とにかく私の足手纏いにならないよう、お願いします」

あっちゃんあ……。やっぱり大声での印象付けは難しかったかな。ただ、彼女の性格に対する小さな怒りが生まれかけていた。

「訓練はおよそ三日かかるが、ちゃんとして来れるか？」

「……それじゃあ、一日でお願いします。彼女にもあまり『メイワク』かけたくないんで」

もちろん雨宮上官はそんなに簡単なことではないと言った。

だけど、わたしは追いつくためなら、どんな努力も厭わない。いつか強くなったら、うん。とにかく今は頑張るしかない。

「分かった。橋越がそう言うなら仕方がないが、アミエーラ、異論はないな？」

「ええ。私もそちらのほうがこんな面倒なことに付き合わされないで、非常に助かります」

いちいち上から目線だ。好きになれそうもないな。せつかく同期でここへ来て、そのうえ同性だから会話が合うかなあと思っただのに。

「それでは、三日分の訓練を今から纏めて行おう。まずは攻撃、変形、バレット、ガード、道具の使用方法。これらの基本動作ができたら実践の一環としてオウガテイルの討伐任務に出てもらおう。そして、中型以上のアラガミへの対処法も指示する。これをすべて一日で行うため、少しの遅れが大きなタイムロスにつながる。早急に行うように。以上だ。いいな？」

「了解ですっ！」

1105 自室

「睦月ケイスケ」

「片付けられるっていいですね。ボクはてんで駄目ですから」
彼がウィラードさん。ここへ彼が来るのも二度目のはずなのだが、彼にとってここへ来るのは初めてのようだ。そもそも、それを確かめるためにここへ招いたんだ。だから、思い切って聞いてみることにしよう。

「ウィラードさん。……ここへ来るのって、2度目ですよね？」

初めてじゃ、ないですよね」

「君が初めてっていうのなら初めてでしょうし、2回目って思うのなら2回目ではないでしょうか」

はつきりしろっ。自分の頭で考えろと言ってるように思えた。

「あと、ウィルって呼んでくれていいですよ。長いでしょうし。それに、同年代だから敬語なんて使わなくて結構ですよ」

「あ、……うん。その、……ウィル」

「とりあえず、何か飲み物持ってこようか。あ、コーラとサイダーがあるけど」

「サイダーで。サイダー」が『いいです。……ボクの言ってることの意味は、分かりますよね?』

……この人、サイダーか? (註: サイダー= サイダー愛好家)
サイダーはコーラーをどうも目の敵にしているとかなんとか。

(註: コーラー= コーラ愛好家)

「はいはい、分かりました。ついでにいろいろと話聞かせてほしいです、南米地区の話とか」

「……そうですね、まずは初めから」

いざ彼が語りを始めようとしたところで、ノックもなしにドアが開く。げっ、あのタカビー女じゃねえか。

「あ、アミエーラさんですか。どうかしましたか?」

「どうしたもこうしたもありませんっ、メールちゃんと見ましたか?」

「メール? なんですか?」

タカビー女はとぼけないで下さいと一蹴する。

「南米支部にはそのようなものはなかったの。世界はすぐに進むものなんですよ」

「だから、これから任務へ行きますよ!!」
「そうなんですか？ ケガをしないように頑張ってくださいね」
「うわぁ、天然というかこれ、わざとじゃないか？ ……恐ろしい子っ!!」

とうとう痺れを切らした彼女は、ウィルの襟首を掴んで引きずっていく。

「わ、わ、何するんですかっ!？」

「いいから行きます！ 文句言ったら殴り飛ばしますよ?!」

「と、とりあえず二人とも、頑張れよ……」

本当に、ただ手を振るしかなかった。

1410 エントランス

「ウィル・シャムロック」

「連れてきました。本当にこの人って、自覚が足りてませんね」

「自覚はちゃんとありますよ。ただ、少し寝不足だけです」

「おい、あんなに寝ていたのにか？」

「雨宮隊長に突っ込まれた。ボクは半月ほどぐっすりだったそうだ。」

「……少なくとも、『ボク』は寝ていたみただけだ。」

「さて、初任務ですね！ なんか戦争ゲー ゴホゴホ、潜入取材みたいでめちゃくちゃ楽しみですな」

「何言ってるんですか！ これからの戦いは取材とかじゃないですよ？ それにあなた方、本当にやる気があるというんですか?!」

「そりゃもちろんありますよ。10体でも100体でも何体でも蹴散らしてやりますっつてば」

「やる気がなければ、このような場所へは来ずに寝ていますから」
空気がちよっと痛くなってきた。アミエーラさん、怒ってるみたいだ。

「さ、さて行くとするか。ところで、今回の任務の討伐対象は分かっているな？」

「シユウ2体です。シミュレーション通りにいけば、10分も時間はかからないでしょう。……あなたが足を引っ張りさえしなければ」

「シミュレーション、ですか。本当にそううまく行くといいんですけどねえ、あなた一人で」

兩宮隊長は困っているみたいで正直不安だ。確かに、困ったさんがここに二人もいるのだから、相当大変だと思うな。

「お前もだ」

「そうなんですか？」

1512 贖罪の街

「橋越ルカ」

昨日の訓練の疲れはすっかりとれた。さすがはわたし、といったところかな。体力には結構自信あるし。あ、でもほとんど栄養ドリンクのおかげのような気もするけど。

「……緊張、しますね。収まってほしいですよ。どうにかありませんか？」

「わ、私に聞かないでくださいよ、聞くならあの旧型の隊長にお願いします」

旧型の隊長、ね。ひどい言い種よ、ほんとに。旧型って言

つても隊長じゃないの、ちゃんと敬意を示さなきゃ。

「おい、ウィル。起きてるのか？」

「……あわわ、すみません。寝かけてました」

隊長は隊長で大変そうだなって思ったけど、一番大変なのはどう見てもアミエーラさんっぽい。わたしもちょっと心配そうに見られてるみたい。そりゃわたしがこの中で一番実戦経験ないけどさ。ちゃんと訓練は一通りやったから大丈夫だって。……自信ないけど。

「それじゃあ行くとするか。じゃあ、お前らに大事な命令を、」

「結構です。旧型は旧型なりに頑張っていただければいいので」

なんて横柄な態度なの？ わたしもいい加減堪忍袋の緒が切れそうだった。

「おいおい、そんな言い方しなくてもいいじゃないか」

それでも隊長さんの対応は大人。将来はこんな旦那さんがほしいな。わ、やだ、何考えてるんだろわたし。

アミエーラさんをなだめるように隊長さんは、彼女の肩に手を置いた。

「きゃっ?!?!」

すると彼女は何かに憑かれたかのように、その手を払いのけて飛びのいた。……その眼には、恐怖の色が感じられて、ますます彼女が何を考えているのか分からなくなる。ただ言えることは、彼女が男性に障られることを嫌っているわけではないこと。

そして彼女もまた、自分が何をしたか気付いたようだった。

「す、すみません。……取り乱してしまっ」

「ただ隊長さんはそれを咎めることはなかった。彼は優しく彼女に言う。」

「混乱した時は、空を見るんだ。それで、動物に似た雲を探すんだ。……そうすれば万事どうにでもなるさ。それじゃあしばらくそうしているといい。行くぞ、ウィル、ルカ」

「了解です」

「……あ、はい」

わたしは隊長を追って走り出して、一度彼女を確認するために振り返る。彼女は素直に隊長の言うことを聞いて、空を見ていた。性格は、そこまで悪くないかもしれないと感じた。

ターゲットを探していると、マップに赤い丸が表示される。向こうがこちら側を確認したようだった。

「やっと出てきたか。じゃあ二人とも、援護はしっかり頼んだぞ」「了解です！……って、あれ？」

シヤムロックさんがポツリと立ち止まっている。まさか寝ているんじゃないだろうか？ 立ったまま寝るとか器用だなあと思った。もちろんそんな特技はほしくない。

「あの、シヤムロックさん？ もしもし、聞いてますか？ 気を抜いたら危ないですよ」

彼は目をつぶっていた。やっぱり寝てるんじゃないか。とりあえず早く起こしてあげようか。

……だが、彼はゆっくりと口を開く。

「なア、……誰が気を抜いてるんだ？」

「え　　？」

彼は重みのある声で呟いた。なんとというか、雰囲気agaraりと変わったような気がする。先ほどまでの彼とは違う、なんだろうか。なんと形容すればいいのか……？

「うっ、うおおっと！ おいお前らっ？！ いい加減に援護をしろ！！」

どうやら火球に手間取っているようだが、遠くで見ていると少々動きが滑稽に見えた。……たぶん面と向かって言ったらぶっ飛ばされると思うけど。

「とにかく、あいつをポロポロになるまで甚振ってブチ殺れ、ツてことだろ？ 了解了解」

そう言っただけで彼は神機を構える。やっぱり何か違う。先ほどまでの落ち着いた寝坊助の彼とは違う、好戦的な人。

……そして勢いよく走り出して、シユウの手前で踏み込んで、胴に一太刀浴びせる。そして振り返りざまにもう一太刀。……彼の神機の刀身はどう見てもショットである。だが、この動きはロングのそれと同じであった。かと思えばショット風に切り上げ、バスターのコンボ締めのように剣を叩き下ろす。

「我流ってやつかな。 なんとというか、破天荒ね」
そんな無茶苦茶な攻め方でも、あちらの攻撃を完全に避けているところから見て、あくまで完成形のようなだった。

「って、見てる場合じゃないか。わたしもそろそろ援護したほうがよさそうね。よーし、張り切っていこう！」

わたしは背後のアラガミに気付かなかった。そしてその腕翼がわたしの体を覆って、

「気を抜きすぎです！ なんで気づかないんですかっ？！」

遠くからレーザーが飛んできて、その弾はシユウの頭部を貫通し

た。血が体にべつとりと付いたが、シユウが一瞬怯んだところではなく戒めを解いた。うう、気持ち悪い！

「あ、ごめんなさい。ちょっと、あなたのこと本当に遅いなあ、遅すぎだなあと思ってたところで」

「結構です。それより、旧型の隊長は、今どんな状況ですか？」

「シヤムロックさんが援護しているみたいです。……任せておけば大丈夫ですよ」

無論、彼女はそれを信用できていないようだった。だからこそ、彼の戦っている様子を見て、先ほどの様子とのギャップに相当驚いているようだ。

「それじゃあアミエーラさん。こっちはこっちで、倒してしまいましょうか」

腕組みをして挑発するシユウ。そして攻撃の構えを行ったのを確認してから、遠距離からのホーミング火球を紙一重でかわす。

「足を引っ張らないようお願いしますね」

「あなたこそっ！」

わたしは剣形態に切り替え、昨日習ったとおりのことを次々と行ってみた。少々きこちないけど、二人がかりなら何とかなりそうだ。

『橋越、なかなか物事の呑み込みが早いな。こういったことは得意なのか？』

『まあ、好きこそものの上手なれってやつですよ。そうじゃなきゃやる気ないですから』

なんだなんだ、シヤムロックさんと微妙に思考回路が同じじゃないか。ちよつとシヨックだ。

「雨宮リンドウ」

「俺が援護される側なんだが」

彼 ウイルの剣技は、それぞれのスタイルをミックスした、よく言えば独創的な、悪く言えば滅茶苦茶なものとなっている。一体誰に教わったのか、じっくり聞いてみたいものだ。それよりも、困ったことに完全に立場が逆転してしまった。

「おいおいどうしたよオ、もツと強く抵抗したらどうだ、えエ？」

彼が先ほどまでのおっとりした奴と同一人物だと聞かされても、俺はまず信じない。まるで我を忘れてしまっているかのようだ。

「おい、ウイル。そろそろ下がれ」

「やなこツた。こいつが、こいつが仇だツたらどうするんだよ？オレの手でケリをつけなきゃ、いけねエンだよ！」

彼の戦いにおいての冷静の二文字が、徐々に失われていく。先ほどまでは積極的に攻撃を避けているように見えたが、だんだんと傷つくことも厭わなくなってきたようだ。それにしても、先ほど言ったことが引つかかる。仇とは、一体誰の仇のことだろうか。

「うおりゃああツ！……へへツ、見事な血しぶきじゃねエか！！これぐらい出してくれねエと償いにはならないぜ？！」

顔中にべつとりと付いた血を服で拭い、小さな笑みを浮かべる。

軽い狂気を感じた。やはり彼を、止めるべきだ。

「おいウイル、少し頭を冷やせ。自分の体の心配ぐらい、自分でし

たらどうなんだ」

「そいつはどここの誰の掟だよ？ オレはオッサンの掟通りに戦ッてるだけだ。『殺るなら最後まで積極的に、人を呪わば穴二つ、サーチアンドデストロイ』ッとな」

どんな掟だ。最後のサーチアンドデストロイだけがとても浮いているぞ。

「とにかく少し落ち着いたほうがいい。アラガミにどんな怨みがあるかは知らないが」

「やだね。オレはあんたのことを気に入ってはいるけど、生憎信用はしてないからな」

……気に入られているのか。悪い気はしないが、……これまで会って話したことなどないというのにな。

再び彼は戦いだす。……彼の体もロボロだが、それ以上にターゲットのシウもひどい。頭部、腕翼、下半身、全てが結合崩壊を起こしている。とにかく3年という年月以上の実力は確かに備わっているようだ。

だがしかし、一つ疑問が生じる。それは、彼が一度も捕喰を行っていないところだ。新型の神機使いは通常、リンクバーストなどを行うために適宜捕喰を行う。そうでなくとも、バースト状態の恩恵は大きいため、隙あらばチャージ捕喰を、攻撃の合間を見計らってコンボ捕喰を行うはずだ。だが彼は、その両方とも行おうとしない。自分に課したルールか、はたまた掟とやらか。

「 はア はア …… あばよッ、奈落の底へ帰れよッ、そして二度と戻ってくんじゃねエ……」

シウは倒れ、動かない。どうやら終わったようだ。結局、彼の独擅場となってしまった。

彼の血走った目と、その口元に浮かんだ歪んだ笑み。

彼が

ウィラード・カーライル・シャムロックと一致しない。彼のアイデンティティそのものが、揺らぐようとしていた。

1520 贖罪の街

「橋越ルカ」

「ふう、ようやく終わったみたいですね」

にこりと、戦闘を始める前のいつもの笑みを浮かべるシャムロックさん。

だけど、体はボロボロなうえ、顔にべっとりと付いた黒血が、拭われないでいて少し怖い。

「だらしないですよ。ほら、タオルです。……古くなった奴ですからあげますよ。汚された奴を返されても困りますし」

「わ、ありがとうございます」

彼はタオルで顔を拭くけど、ただ血を塗り広げているようであまりきれいにはならないようだった。

「……あ、橋越さん」

「なんです？ ……あつ、説教はよしてくださいよ、慣れてるっっちゃ慣れてますけど」

わたしが少し身構えたのを見て、怪訝な顔をする。もう、何が言いたいのよ？

「あなたも自分の顔拭いたらどうですか？ シャムロックさんのこと笑ってる場合じゃありませんよ」

「べ、別に笑ってないです！ というか笑えませんか」

それは彼女もごもつともだったようだが。とりあえずポーチからハンカチを取り出して拭いた。うう、べっとりと付いてたよ、汚い

な！。

「動いたから少し眠たくなってきましたね。ところで、ヘリはいつ来るのでしょうか？」

「そう焦らなくてもヘリは来る。……ほら、来たぞ」

隊長がそう言ったのを聞いて、わたしは空を見上げる。そこにはボディーを黒光りさせながら、こちらへ近づいてくるヘリがあった。……わたしはその時初めて、昨日の訓練とは違う何らかの達成感を感じたような気がした。

5・REINFORCEMENT（後書き）

新型を大量投入した結果がこれだよ！ ああ、まさにカオス。というか、この中に本編の主人公みたく悩みも何も抱えていない奴っているのかな。

はっきり言つてこの話の主人公はケイスケ。他の3人のオリジナ
ル新型は、いろいろ問題を抱え込んでる奴ら。どんな問題かは、の
ちのち明かされていくだろうけど。

とりあえず、目標の『アリサを出す』はクリアしたぞ！ という
わけで次の目標は…… 『オオグル』（以下省略
それでは次回まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2274z/>

GOD EATER -PL/RAYERS-

2011年12月18日01時52分発行